お兄ちゃんからの招待

クー子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
お兄ちゃんからの招待

【Ｎコード】
Ｎ２２３５Ｎ

【作者名】
クー子

【あらすじ】
知らない先輩に呼び出され、平手打ちを食った私。
次の瞬間には、まったく別の場所にいた。
しかも、目の前には死んだはずの兄に瓜二つの人が・・・

召喚された？

「ちょっと、来て！」

そう言って、学校の先輩だろう人に首根っこを掴まれ引きずられ校舎裏に連れてかれ、いきなり
パーンと平手打ちを頂いた。

次の瞬間私は、まったく別の場所にいた。

気がつくと広い場所。
だけど、さっきとは全く別の場所で真っ先に目に入ったのは目の前にいる人物。
真黒な衣装に身を包んでいるいわゆる童話やゲーム（ファンタジー物）なんかに出てくる魔導師
みたいな格好をしているが、明らかに良く知っている人物に瓜二つ。
でも、その人物は生きてはいない・・・。
だからもう、会えないはずだからその人物のはずはない。
私は、じっとその人物を凝視していた。
ただ、ひたすらその人であってほしいと思いながら・・・。

すると、魔導師みたいな人は、私の目の前にやってきて
私をそっと抱きしめた。
耳元で「会いたかった」と言って。
その声は、明らかにあの人だった。
でも、そんな訳無い。だってもう死んでいたんだから。
じゃぁ、このヒトはダレ？
頭の中が混乱しすぎて何が何だか分からなくなっていると、
お兄ちゃんはクスクス笑い出し

「ごめんごめんイキナリだと混乱するよね。」
そういって、いつの間にか流していた涙をぬぐってくれた。

「久しぶり、会いたかったよ。3年前より成長したよね？夕美。」
（確実に目線が怪しかったので、無視）

「・・・お兄ちゃんなの？嘘。」
そう私のお兄ちゃんは、もう亡くなっていた。
3年前に・・・。
「あーそのね、実はね死ぬ直前にこっち側に
来ちゃったものだから実際は死んでなかったんだよ。」
「・・・こっち側って何？？」
「えーとね、判り易く言うと異世界ってやつ？」

召喚された？（後書き）

ども、ファンタジー初でした。

候補？（前書き）

只今、最初から手直しています。
なんてカッコいい事言っていますがぶっちゃけ時間置き過ぎて
どういう物だったか忘れてました（笑）
なので、読みながら多少変えるとこがあると思いますが
大筋変わらないと思います。

候補？

はい？

とりあえず、お兄ちゃんは本物だよね？？
「あの～、お兄ちゃん本当に私のお兄ちゃんだよね。」

「・・・ひっひどい、僕はこんなに会いたくて仕方なかったのに（泣）」
あっ、この反応本物っぽい。
「夕美は、僕の事もうどうでもよかったの？忘れてたの？あぁ～もしかして、
僕のいない間に、夕美に悪い虫でもついて、悪い影響受けちゃったりしたんじゃ！
うぅ～僕の可愛い夕美が～（泣）・・・」

はい本物、確定。
この反応は、お兄ちゃんしかいません。
でも、変わってないな～
「お兄ちゃん、生きていて良かった。」
そう言ってとりあえず、再開を喜んでいた・・・んだけど、

後ろから、
「もういいかしら？」という声。
あぁ、アノ先輩も来ていらしたんですね。
恐る恐る後ろを振り返ってみた。

すると、案の定かなりご立腹の先輩。

「あの女誰(ヒト)？」と、お兄ちゃんからの質問。

「・・・知らない。制服からして学校の先輩じゃないのかな？」

「なんで、ココにいるの？」

そのセリフ、お兄ちゃんが言いますか？

「いや、それ言っちゃっていいの？」

「だって、僕が呼びたかったのは、夕美一人だけだもーん！」

ってことは、巻き添えですか・・・。

少し呆れていると、「おい！終わったか？」

イキナリ、兄の後ろから知らない男の人の声。

「まぁ、一応終わりました。」

「で、俺の花嫁は？」なに～！！

「お兄ちゃん、私をあいつの花嫁にするために呼んだの？？」

すると、ニッコリ♪

「そんなわけないでしょ。僕の可愛い、大切な夕美なんだから。

夕美は渡しませんよ。絶対！」とお兄ちゃんが言ってくれた。

「本当は夕美の後に呼び出そうとしたんですが、

今回どうやら、夕美ともう一人来てしまったらしくて・・・。」

「ていうと、そっちか。」

「そうかも知れませんね～。運命デスかね、良かったですね。」

「うぁ思いっきり棒読み、まぁいいや。」

良いんですか。

お兄ちゃんの事？

今、ここにいる場所はちょっと暗くて判らなかったけど、
だんだんと近づいてくるもう一つの人影をよくよく見てみると、結構カッコよかった。
髪の色は、銀色。
目の色は、水色。
背も兄ぐらい高く、髪の長さが女の子で言うショートカットって感じ。
ちなみに兄は、私と同じ黒眼、黒髪、ちなみに髪はもう一人の人と同じ長さぐらい。
そして、なぜかいつも兄は銀フレームの伊達メガネをかけている。
以前理由を聞いたら気まぐれで、かけているらしい。
私たちの横を過ぎ、先輩の前まで行くとひざまづき、
イキナリ手をとり、キス。
そして、「私の花嫁、結婚してください。」
球根いや求婚した。

兄に「異世界ってすごいね～　いや、異世界云々じゃなくてキザなのか？あの人は。」
と考えていると、「あーいう変態には近づいちゃだめだよ。」と、教えてくれた。
どういう「変態」かは知らないが、そうか「変態」だったのか．
とりあえず近づかないでおこう。

「変態」と言う事を教わっている間、あちらでは
先輩は顔を真っ赤にしながら「えっ、・・・はい。」と答えた。
おぉ～♪カップル成立だ。

そして、場所を移動。
移動を始めるとこれまたすごい。
広いのなんのって、すれ違う人の衣装がこれまたすごい。
仮装大賞でもやるの？って感じ
メイド服を着てる女性。
良くゲームや本ナンカに出てくる感じの騎士の格好をしている男性
「お兄ちゃん、ココってゲームの世界デスか？」
「言うと思ったケド違うよ。言ったろ異世界だって。」
そして、着いた部屋に通され、一通り説明を受けた。
まずなぜ、私たちがあそこにいたか。
それは、今回セリさん（セリウッド＝バレン）が今回花嫁を召喚しようとした
ら私たちがあそこにいたらしい。
ちなみに私が呼ばれたのは兄の我がままで、セリさんにはちゃんと許可を貰っていたらしい。
そして、巻き添えをくった先輩だったが花嫁（今は婚約者）となった。
この後、本当なら私は兄の元へ
先輩は、セリさんと城へ
と思ってたんだけど、ちょっと違った。
セリさんの婚約者としては後ろ盾が必要らしい。
ということで、どうやら兄に先輩を任せるようだった。
何でもこの国で兄は、結構有名な人物らしくそのうえセリさんとも繋がりがあり、
後ろ盾としては十分だそうだ。

お兄ちゃんの事？（後書き）

ども、オハヨウゴザイマス。
今日も暑そうですね（＾＾；
やっと、3話までたどり着けました。
けれど、うん・・・色々細々した設定なんかがまだ全然できてないんですよね～
これって本当は最初にやること？
とりあえず、少しずつ進めようと思っています。

あっ今回も読んでくださり、ありがとうございました。

身の置き方

とりあえず先輩は、お兄ちゃんの妹として養子になることに・・・。
そして、結婚するまでは兄のところで暮らすらしい。
というのが、セリさんの命令。
お兄ちゃんは「俺の妹は、夕美だけでじゅうぶんだ～！！」なんてさけんでたけど（笑）

命令ってことは、セリさんはお兄ちゃんの上司か何かかな？
不思議に思っていると、その疑問にお兄ちゃんが答えてくれた。
「セリは、この国の王子なんだよ。」

先輩の今後は決まり、
今度は、私の番。
当然兄が「一緒に暮らそう♪」と言ってくれたけどなぜか私は、先輩の猛反対に合ってしまった。
何でも、「こんな子と一緒にいたくない！」だそうだ。
それを聞いたセリさんは、兄が私を引き取ることを禁止した。
私は、兄へのところに行けなくなってしまい困っていると、
兄はものすごく悲しそうな顔になりじっとこちらの顔を見てきた。
「これからどうしようか・・・。」

そういえば、私は兄以外行くところが無い。
う~ん、とりあえず町に行って住み込みで働く所を探すか。
そうと決まれば、兄にその意思を伝える。
すると、「いや、絶対一人で行かせたくない！危ないよ？日本とは違うし・・・。」
「でも、他に行くと来ないよ？」
「う～ん・・・？！セリお前のとこは？下っ端でもいいからさ。」

「マヤの嫌いな子を置くのは、あまり気が進まないが、そういう理由なら仕方がない。」
そういってセリさんは、メイド長を呼び出した。

メイド長は、アン＝ラドリーさんと言うらしい。
私はアンさんに連れてかれて、１つ部屋へ。
２つのベッドとその真中にテーブル一つの簡素な部屋だった。
今日からココから私の部屋になりらしい。
そして、同室者がらしい。仲良くしたいな♪
などと思っておると、ドアが開いた。
アンさんは「ちょうどよかった。メイ今日から入った子だよ。」そういって同室者の子に紹介してくれた。
そして、「仕事内容は、メイと一緒だからね、メイ教えてあげておくれ。」

初めての友達（前書き）

こんにちは。
いつも読んでくださりありがとうございます。
おかげさまで、いつの間にか《お気に入り》登録してくださった方がまだ5話しか進んでいないというのに、13人も！♪
最初見た時は、驚きやら、うれしかったです☆
これからもよろしくお願いします。

初めての友達

どうやら、仕事内容はメイという子にと一緒らしい。

「じゃ、私は行くからね。２人とも仲良くね。」

そう言って、メイと２人きりになってしまった。

メイと言う子は、ほわわ～んという感じで、薄茶の髪が肩ぐらいまであって、フワフワとウエーブがかかっていて、目の色は髪の色を思いっきり濃くしたようなこげ茶と緑の混ざったような色だった。

メイの第一印象は、「可愛いｖ」の一言。

さっそくお互いに自己紹介をし、

少しづつ話していくと、意外にメイは外見に似つかないしっかり者と判明。

しかも、性格も良くとてもいい子だった。

明日から、２人一緒に仕事ということで、すっかり打ち解け

こちらの世界での初めての友達になった。

「でも、来てくれてよかった～。この間一人やめちゃって大変だったの。」

「そっか。」

どうやら、メイの元相方はついこの間辞めちゃったらしい。

「仕事ってどんな事するの？」

「単純なことよ。庭師さんのお手伝い（花の水やり）と夕食作りの野菜の皮むき」

「そっか～、明日からよろしくね。」

「こちらこそ、よろしくね。」

メイと話していると、時間が経って夜になってしまった。

「とりあえず夜食食べに行こう？」
誘われたので、もちろん「うん！」と答えた。

食堂に着くと、たくさんの人たちがいてとても賑やかだった。
「この人たち全部メイドさん？」と聞くと、「そんなわけないでしょ？騎士のひとたちや魔術師やその他もろもろ城で働いている私たち平民は、大体ココで食事をとってるの。」
「そうなんだ～。」
「そんなことより、早く席確保しましょ♪」
「うん！」
そういって食事を受け取った後、何とか席を確保した。
私たちが食事をしていると、何だか背中が重い・・・。
メイに「背中が重いんだけど、何かいる？」
と聞くと、メイが背中を指差して顔を真っ青にしてた。
「どうしたのメイ？」すると、
「うしろ・・・。」
うしろ？私は、顔を後ろに向けて見ると真黒い物体いやお兄ちゃんが背中に
寄りかかっていた。
「何してるの？おにいちゃん。」

一日目終了

するとお兄ちゃんは、
「ちょっと、夕美に用事があったんだ。ここじゃなんだから
食事終わるまで待っていて良いかな？」
そういって、私たちの食事が終わるまで本当に待っていた。
私の背に寄りかかって・・・重かった。
そして食事が終わると、「じゃ、部屋に行こっか？」そう言って何故か
お兄ちゃんは、張り切って私たちと部屋へ移動し、
3人でテーブルを囲んで座った。
「で、どうしたの？お兄ちゃん。」
すると、私の方に視線を向け「夕美、だいじょうぶ？やっていけそう？」と
聞いてきた。

私は、「大丈夫。もう初めての友達も出来たんだよ♪この子、メイっていうの。」
そう言って、お兄ちゃんにメイを紹介した。
するとお兄ちゃんも「初めまして。兄のカズキです。夕美をよろしくね。」と、
メイに向かって自己紹介。
「よかったな、安心したよ。」そう言って、嬉しそうに頭をポンポンとしてくれた。
あっちでお兄ちゃんが死ぬ以前（実際には死んではいなかったんだけど）
悲しかった時嬉しかった時には、頭をポンポンとよくやってくれた。
それは、お兄ちゃんが以前と変わっていないという事でとてもうれしかった。

顔に出ていたのか私がニコニコしていると、「どうかしたの？」と聞かれ
メイに不思議がられた。
私は、「何でもないよ。」と言って、お兄ちゃんに「用事ってこれだけ？」と聞いた。
「違うよ。夕美はこっちに来る時、生活に必要最低限の物もって来てないよね。」
「うん。」
「そう思って、コレ。本当は、一緒に買い物に行ければいいんだけど、行けないから。休みの日に買い物に行っておいで。」
そう言って、革袋をくれた。
こっちで言う財布だろうか？
持ってみると、中からジャラジャラ音がする。お金かな？
「こっちのお金の単位とか買い物の仕方みたいなのとかどうせよくわからないだろ？メイちゃん、悪いけど休みの日町に連れて行ってやってくれるかな？」

「はい、私でよければ・・・夕美ちゃん一緒に行こうね！」
「うん。よろしくね♪」

「あっそうだ、少し余計に入れといたから、それでランチ2人でたべてね。」
「ありがとう、お兄ちゃん。」
「それじゃ、俺は行くから、メイちゃん夕美の事よろしくね♪」
「はい！」
そういって、お兄ちゃんは部屋を出て行った。

夜、私たちは、それぞれのベッドに入り話をしていた。
「良いお兄さんだね。」

「うん。」
「そろそろ寝よっか。明日はやいわよ。」
「え～、朝よろしくね。」
「はいはい♪」
「おやすみ～。」
「おやすみなさい。」
そして、こっちに来てからの一日目が終わった。

一日目終了（後書き）

こんにちは。
「お金の単位」買い物の場面を書くんだったら、
考えなきゃいけないですよね～。
買い物・・・たぶんもう少し先になると思いますが出てくると思います。
それまでに考えときます。

少年

翌日、メイの相方一日目。

メイには、「いつまで寝てるの？（笑）」といって布団を剥がされた。

「後5分だけ～」と言うと、ほら朝食食べそこなっちゃうわよ！

といって、起こされた。

やっぱ、朝はねむいな～・・・。

支度を終えてメイと昨日の食堂へ。

相変わらず、すごい人。

ちなみに、今の服装はよく秋葉なんかにいるメイドさんの様な格好。

でも、動き易いようにシンプルになっていて、レースとか装飾とかほとんど付いてない。

スカートは、ひざ下まである。

この世界では、これでも短い方だという。

私たちは仕事上、動き回るからこんな服装になったそうだ。

（いや、わたくしこれで十分ですよ。メイさん）

服装の事を考えながら食事を終えると、城の中にあるお庭へ。

お庭には、たくさんの花が植えられていて、その前には大きな木が一本あった。

その木には、少年が一人木の枝に座っていて、私と目を合わせるとニッコリ笑ってくれた。

私も、嬉しくてニコッて笑い返した。

それを見たメイが、「どうかしたの？」と心配そうに聞いてきたので、

「あそこの木の枝に少年が、座ってるでしょ？」と指を差すと、

その少年は、もういなかった。

「あれ？」

「気のせいじゃないの？」

「そうかな～？」

少年（後書き）

おはようございます。
いつも、読んでくださってありがとうございます。
見るたびに登録数が増えている気がするのですが・・・幻でしょうか？
なんかすごくうれしんですが！
・こんな、ほんとにファンタジーなの？（なんせ、初めてなので・・・
・
読んでいる方ご判断ください（汗））
・恋愛要素まだ全然出てきてないよ？（いや、これからの予定・・・
）
など、突っ込みどころ満載ですが、気長にまっててくださいね☆
特に、恋愛の部分。

仕事

気を取り直し、私たちは花をいじっているおじさんのもとへいった。
「この人は、ここの庭師でアンさんの旦那さんよ。」
メイがおじさんを紹介してくれた。
「ロイック＝ラドリーです。よろしく夕美ちゃん」

あれ？
「なんで、私の名前知っているんですか？」
「あぁ、昨日君のお兄さんに会って宜しくと頼まれたしね（笑）」
「・・・」
「ちょっと過保護だけど、良いお兄さんだね♪」
「はい♪」
「と言うことで、よろしくね。」
「あっ、こちらこそ宜しくお願いします。」
そういって、ロイックさんにごあいさつ。

そしてお互い挨拶が終わると、メイと一緒に端っこにある井戸へ行きまずは水汲み。
そして、大き目のジョウロに水を入れ花に水をあげる。
ジョウロは鉄で出来ていたけど、軽かった。
2人で水をあげている最中メイに聞いたら「それは、軽くなる魔法が掛かっているから」
だって。
それでもこの広さ、たくさんのお花に2人でも水をあげるのは一苦労だった。
これを、一人でやっていたメイはすごいと思った。
そのことをメイに言ってみると、実際は時々ロイックさんやほかの人たちに手伝ってもらっていたそうだ。

どうにか、お昼の鐘の音が聞こえ少したったころ無事終わった。
私たちは、ロイックさんに「お先に失礼します。」と一言うと、
「じゃ、また明日。」と、言ってくれた。
良いおじさんだ。

そして、メイと昼食をとるために食堂へ。
相変わらず、混雑していた。

昼食が終わり、一休みすると食堂の裏へ向かった。
すると、野菜がごろごろしていた。
メイは、「じゃ、やろっか！」
そういうが、私はこの世界の野菜事情なんて全く知らない。
「メイ・・・あの・・・出来れば、教えてもらえる？」
「えっもしかして、刃物持ったことないの？」
「いや、そっちじゃなくて・・・。」
「どの野菜の皮を、どんなふうに剥いたら良いか。」
「・・・とりあえず、そこの緑の丸い野菜の皮をこうやって剥いていこう。」

緑・・・この世界の野菜たちは教えてもらっていくととてもカラフルなことが判明。
けれどそれは、皮だけで皮は硬く食用に向かないそうだ。
だから、食堂でご飯食べてても、気づかなかったのか。

黙々とメイと一緒に野菜たちと悪戦苦闘していると昨日メイの元に連れてきてくれたアンさんが
やってきた。
「どうだい、調子のほうは。」
「あっはい、おかげさまで。」

「あんたが、来てくれて助かったよ。メイもいい加減一人じゃかわいそうだったしね。」
「私のほうも、行くとこ出来て助かりました。おかげさまでメイと仲良くなれましたし。」
「そうかい！そりゃ、よかった！！」
「まっなんかあったら、いつでも言ってきて良いんだからね。あんたの兄さんから
くれぐれもってたのまれたしね。」
「兄が・・・すいません。」
「いいんだよ！家族を心配するのは当たり前のことなんだから♪ほら、手動かして」
「あっはい！」
「じゃ、メイも夕美もがんばりなよ」
どうやら、アンさんは様子を見に来てくれたらしい。
それにしても、ロイックさんといい、アンさんといいホント良い人だな～。
似たもの夫婦ってやつか？

そんなことを考えながら手を動かしているうちにどうやら最後の一個になったらしい。
最後の一個も皮をむき終わり、今日の仕事しゅうりょ～。
「おわったね♪」
「お疲れ様♪」
「メイもお疲れ様♪」
そう言って、あと片づけをして、夜ごはんを食べて部屋へもどった。

風邪をひいた

少しずつ、仕事が慣れ始めたある日今日は珍しくメイが寝坊？
メイのベッドを覗いてみると、真っ赤な顔して寝ていた。
もしかして、風邪でも引いたのかな？
「メイ大丈夫？今日はメイお休みしたら？今までの疲れ出たのかもよ？」
「う～ん、でも・・・」
「私だったら平気だから、ゆっくり休んで早く良くなってね。その前に、食欲ある？もし食べれそうなら消化に良いもの事情話してもらってくるよ？」
「ありがとう。果物だけお願いしてもいい？」
「わかった。じゃ、ちょっと行ってくるね。あっついでにタオル借りてもいい？」
「良いよ？」

私は、あっちの世界から生活用品を何も持って来れなかったので、こうやって時々メイに借りたり
（制服は支給品）している。
ちなみに、１日目に数枚ほど下着類と着替えはアンさんが買ってきてくれた。
早く買い物行きたいけどね～。
そう思いながら、食堂に向かっているとアンさん発見。
「アンさん！メイが熱があるみたいなんですけど・・・。」
「えっそりゃたいへんだ。わかったよ。知らせてくれてありがとね。」
そう言って、小走りで行った。
私も、食堂へ向かった。

食堂へ着くと、数日顔を合わせるうちに仲良くなった調理担当のおじさん（ミトさんというらしい）が
顔を出した。
「お～、ユミちゃんおはよう！今日は、メイちゃん一緒じゃないのかい？」
「あ～メイは、風邪でお休みです。すいませんが果物を食べやすいように切ってもらえませんか？
メイに持って行ってあげたいんですけど・・・。」
「いいよ！ちょっとまっときな。」
そう言われて、待つこと数分・・・
「これ、持って行ってあげな。後こっちのジュースもな。よくきくぜ！」
そういって、わたされたドロドロした赤いジュースと果物をメイに持って行った。

「メイ～持ってきたよ。」
「あっアリガトウ。」
ジュースを見るとメイは固まった。
「これは・・・。」
「なんか、あのミトおじさんが効くから持って行ってやれって。」
「そう。」
「じゃそろそろ私行かないといけないから、あっついでにタオル濡らしてきたから、
汗かいたらこれでふいてね。」
そう言って、アンさんが用意したであろう洗面器にかけておいた。
「ちゃんと食べて、しっかり休んでね♪いってきま～す。」
そういって、仕事に向かった。

少年と仕事

今日は、メイが休みなので一人。
ちょっと不安だけど、頑張ろう！

ロイックさんを見つけ、「おはようございます！」
と声をかけると、「おはよう。あれ？メイは？」
「あっ疲れが出たみたいで風邪でお休みです。」
「そりゃ、心配だね。」
「はい。」
「とりあえず、仕事始めようか。」
「はい！」

私は、仕事を始めようと顔をあげると、またあの少年が木の枝に座っていた。
あの少年、実は働き始めてから毎朝見かけていた。
けれど、見かけていたのは私だけ。
最初の数日はメイに「あそこにまたいるよ」って教えていたんだけど、なぜかメイに
一緒に振り替えるといなくなっちゃう。
その時よっぽど、人見知りの激しい少年なんだな～と思った。
その次の日からは、メイに知らせなかった。
知らせても、無駄だと思ったし・・・。
人見知り少年にも、かわいそうかな？って思ったから。

少年から井戸のほうへ体を方向転換
仕事を始めるため井戸へ向かった。
水を汲みいつものように、花に水をやる。
何度目か、井戸に水を汲みに行くとそこにいつもの少年が。

「いつも、僕の事見てたよね。」
「あっうん。人見知り激しいんだね？」
「人見知り・・・そうかな？」
「そうだよ！」
「それより、いつもの一緒のおねーさんお休み？仕事大変でしょ？手伝ってあげる♪」
「いいの？ありがとう♪」
そう言って水を汲み、私たちは水の入ったジョウロをもって水やり開始。
やっぱり、1人より2人のほうが早かった。
ロイックさんは、自分の仕事でちょっと庭を離れていたけれど、お昼を過ぎたころ、たくさんの荷物（肥料やら土やら）を抱え戻ってきた。
私たちは、少年のおかげでロイックさんが戻ってくる少し前には仕事を終えることができた。
「ありがとね。おかげでこんなに早く仕事が終わったよ。」
「どういたしまして。じゃ、またね」そういって木のほうに歩いて行った。

少年と仕事（後書き）

おはようございます。
いつも読んでいただいてありがとうございます。
～補足～
今までロイックさんから夕美の呼び名がちゃんずけ
でしたが、少しずつ親しくなり
メイちゃん＝メイ
夕美ちゃん＝ユミ
に昇格しました（笑）
（いや、メイのほうは以前から結構親しいんですけどね・・・ついです。）
以上、補足でした。

弟子

お昼を食べ終わるとメイの様子を見に行った。
どうやら、ちょくちょく仕事の合間にアンさんが見に来てくれているみたいだった。
寝ているメイを見て安心した私は、午後からの仕事に向かった。

午後からは、野菜の皮むき。
いつものように始めようとすると、ミトおじさんが「今日は1人だよな？俺の弟子1人手伝いにソッチやるよ！」といって、ミトおじさんのお弟子さんのシラトさんを紹介してくれた。
「初めまして夕美です、宜しくお願いします。」
「宜しく。」
そして、お互い黙々と野菜の皮むきを始めた。
「メイはへーきなの？」
シラトさんも、メイを気にかけてくれているようだ。
「さっき少し見に行ったけど、すやすや寝てました。アンさんもちょくちょく見に行ってくれているみたいで。」
「そう、よかった。」
あれ？
「メイとは、知り合いですか？」
「あれ？言ってなかったっけ？俺メイの弟だけど。」
「そうだったの？」
「うん！メイの事宜しく。」
「うんそれはもちろん！」
「へ～メイの弟さんミトおじさんの弟子やってたんだ～」
「だって、メイ一人でお城で働かせるなんて心配じゃん。」
「・・・そうですか。」

どっかのオニーサンが言いそうなセリフ。
ここにも居たよシスコン。
いや、まだこれだけじゃシスコンと判断できないただの心配性なだけかも・・・
「だってメイのやつめちゃくちゃ可愛いしさ、変な男にでも引っかかって挙句の果てに遊ばれてッポイなんてされたりしたら、お嫁にもいけなくなっちゃう。いや、お嫁には行かなくて良いんだけどさ・・・・・・」
シスコン決定！！
うちのお兄ちゃんと合わせたらお話が合いそうだわ（汗）
とりあえず、
「まぁ、メイが可愛いのはたしかだよね！」
「おぉ、そうだよな！！」
必殺ご機嫌取り（いや確かにメイは可愛いんだけどね！でも永遠と話聞かされるのも・・・。）
「だから、その可愛いメイに早く会いに行くために仕事早く終わらせなきゃ♪ね！」
「そっそうだな！」
ということで、話を終わらせ黙々と仕事を続けなんとか今日の仕事が終了した。
夜食は、メイ談義をしたシラトさんが一緒に食べてくれました。
そして、「俺もメイの様子見に行きたい！！」というのでシラトさんとお部屋へ。
部屋に入ると、メイは目を覚ましていてだいぶ良くなっていたようだ。
「どう、調子のほうは？」
「だいぶ、良くなったよ。それより仕事のほうは平気だった？」
「うん！いろんな人に手伝ってもらったから平気だったよ？」
「そっか、よかった～。」

「それより、弟いたんだね～♪」
「えっ」
「来てるよシラトさん」
「メイ、平気か？」
「あっうん、もう大丈夫。心配してくれたの？」
「会たり前、メイは働き過ぎなんだから。」
「ありがとう。それよりそろそろ戻らなくていいの？」
「あっやべ、じゃそろそろいくよ。またなメイ、ユミ、メイの事よろしくな。」

「弟の性格わかった？」
「う～ん、うちのお兄ちゃんみたいな性格だってことはわかった。」
「でも、メイの事本当に心配してたし良いんじゃない？良い弟さんじゃん。」
「う～ん、まあね♪」
「そろそろ寝た方がいいんじゃない？良くならないよ？」
「うん、心配かけてごめんね？」
「いいよ、このぐらい。」
メイが寝たのを見て、私も寝る支度をして、ベッドに入った。

弟子（後書き）

こんにちは☆
メイの弟初登場でした。

お泊り1

週末、メイと私は休みをもらった。

すると、それを聞きつけたお兄ちゃんが「じゃあお休みの前の日は、泊まりにおいで。」

と言う。

けど、「先輩はなんていってるの？平気？」

そう、お兄ちゃんの家にいる先輩に私は嫌われていた。

なぜかは知らないけど。

「一日ぐらいだったら平気だよ。ちゃんとあの子にも話したしね。」

「そーゆーことだったら、仕事終わったら行くね。メイと一緒でいい？」

「もちろんいいよ♪」

ということで仕事が終わり来ましたお兄ちゃん家。

貴族と同じくらいの身分を持っているだけあっておっきなお屋敷だった。

お屋敷って言っても、和風ではなく洋風な作り。

門から入り庭を通ると一面芝生が敷かれていて小ざっぱりしていた。

その庭には、大きな木がぽつんと1本立っていた。

お屋敷の玄関に着くと、ドアが勝手に開きお兄ちゃんと女の子が立っていた。

「いらっしゃい。よく来てくれたね☆」

「お二人のお部屋の用意はできてますよ♪」

「お招きありがとうございます。」

「お兄ちゃんすごいね～！！」

「そうか？」

「うん！」

「とりあえず2人とも荷物置いてきたら？」
「うん。」
「では、お部屋はこちらです。」
と、女の子が案内してくれた。
「お二人は、お部屋一緒でよろしかったですか？」
「あっはい。」
「かしこまりました。」

部屋に入ると、真っ白な壁紙に青いカーテン
いつもの部屋の倍の広さがあり左右にシンプルなベッドが2つ置いてありこぎれいな部屋だった。
私たちは荷物を置きリビングへ。

リビングには、おにいちゃんやさっきお部屋に案内してくれた女の子、先輩がいた。
「さっき紹介しなかったよね。この子は光耶(コウヤ)光の精霊だよ。って言っても、
このうちで、雑用や家事なんかをやってくれてるけど・・・はははっ(笑)」
「お兄ちゃん(汗)」
「兄がいつもお世話になっています。」
光耶ちゃんに向かい改めて、お礼をいった。
すると、「いえいえ、カズヤさまにはこちらこそお世話になっています。」
光耶ちゃんと少しお話をすると、光耶ちゃんは、キッチンへ
私たちはそれぞれ、ソファーへ座り、雑談をした。

私の前に座っていた先輩は顔をあげて「ねぇ、・・・」
と話しかけてきた。
「どうかしました？」

「貴方、あたしに何か言いたいことないの？」
「・・・別に？」
「どうして？私あの時貴方の事ひっぱたいたのよ？」
「あっ、ありました！」
「なっなに？」
「あの、どうして私ひっぱたかれたんですか？」
「・・・・。」
「心当たりないの？」
「はい。」
「・・・3年の築地君と貴方付き合ってたじゃない！」
「へ？」
「私、生まれてこのかた、彼氏なんて出来たことありませんが・・・。」
「え？うそ！？」
「悲しいことにホントです（泣）」
「・・・悪かったわね」
「で、私なんでひっぱたかれたんでしょうか？」
「間違えたのよ！！」
「間違えた？」
「えぇ、築地のカノジョとね。」
「ソウデスカ。」
「よかったね。誤解とけて♪」
メイの横やりで、なんとなく先輩との会話は終了しちょっと安心。
誤解が解けても、なんかとげとげしい先輩。
少しづつでも、仲良くなれないのかな？

お泊り1（後書き）

こんにちは。
いつも読んでいただいてありがとうございます。

先輩の誤解やっと解けましたねぇ～♪
ちなみに築地君というのは、先輩の幼馴染。
いつか、詳しいこと書けたらいいな～☆なんて（思いっきり未定ですが（汗））
それまでは、みなさんのご想像にお任せしますってことで。

お泊り2

先輩とのお話の後は光耶(コウヤ)ちゃんが作ってくれたお食事を堪能しました。
普段食べられないような豪勢な料理がたくさん並んでて、夢のようだった。
光耶ちゃんって料理上手なんだな～ってしみじみ思ったよ。

食事の後は、「お風呂に入っておいで～」との兄の一言で私は大喜びでメイと、光耶ちゃんに案内されながらお風呂に行き、「一緒に光耶ちゃんも入ろう？」と誘い3人仲良くお風呂へ。
そのすぐ後脱衣所で、ちょこっと私の中で後悔したのはナイショ。
だって、2人とも、ものすごくプロポーション良いんだよ？
出てるとこ出て、引っこんでるとこ引っこんでて・・・。
私、幼児体型ですか？って思わず聞きたいぐらい（泣）
でもお風呂に入ってからは、楽しかった。
女の子3人集まると話も盛り上がって、ちょっと長風呂になっちゃった。

お風呂の後は、涼みながらお兄ちゃんのところへ。
そういえば、国の名前聞いて無かったような・・・。
でもま、知る必要な時になったら聞けばいいかな？
別に今は知らなくても、とりあえず生きていけるし・・・。

と、ぼーっとしてるとお兄ちゃんが覗き込んできた。
「どうかした？調子悪いの？」
「えっ、何でもないよ？」
「あっそうだ、今日はありがとね？おかげで光耶ちゃんとも仲良くなれたし、久しぶりにお風呂にも入れたし！」

「そんなことだったら、いつでもおいで。光耶は俺の居る時だったらいつでも居るし、お風呂だっていつでも入りに来て良いんだよ♪」
「じゃ、たまに遊びに来てもいい？」
「たまになんて言わず毎日でもいいのに～」
「それは無理」
「じゃ、たまにで（笑）」
「うん！」
「そろそろ、メイちゃんと部屋に戻って寝たほうが良いんじゃない？」
「そうする」
「お休み」
「おやすみなさーい。」
メイと部屋に戻りそれぞれ、ベッドに入り休んだ。

夜中なんか隣がゴソゴソ聞こえたが気のせいかと思い、そのまま眠っていた・・・。
朝、肩に重みを感じて確認すると、手・・・・。
手！？
「いやーーー！！お化け！！」
叫ぶと、メイが起きてきた。
「お化けなんていないわよ？」
「でも、肩に手が・・・。」
「はぁ～」
あれ？
「メイ？」
「よく手の主を見てごらんなさい。」
「手の主？」
勇気を持って、手をつかみ、首だけ回してみるとあれ？
「なんでいるの？」

にっこり（笑）
「えーだって、夕美と一緒に寝たかったんだもん！！」
だもんって・・・。
「怖かったんだから（泣）」
目をウルウルさせながらお兄ちゃんに訴えると「ごめんごめん」と
そう言って、背中をポンポンと叩き
ぎゅって抱きしめてくれた。
「もう、怖くない？」
「当たり前！私のお兄ちゃんだもん。」
「よかった。」

お泊り2（後書き）

おはようございます。
ちょこっとだけ、変だと思い直させていただきました。

町へ・・・の一歩手前です。（前書き）

おはようございます。
いつも読んでいただいてありがとうございます。
今回は、ちょっと長めになってしまいました。ダラダラ文が苦手な方ゴメンナサイ。

町へ・・・の一歩手前です。

ひと騒ぎした後は、朝食。
相変わらず、料理の上手な光耶ちゃん。
こっちの材料で創作和食作ってるよ！
今度、教えてもらおう♪

それにしても、朝から和食。
しかも、ご飯まで・・・。
朝から、こんな完璧な朝食久しぶりだよ！
やっぱ、お兄ちゃんも日本人なんだね？
身長は、日本人離れしてるけど・・・（汗）
隣に座ったメイを見てみると「何これ！？」
ってビックリしてたから、「これは、和食っていうんだよ。あっち
にいるときは、
私こういうの主食だったんだ。」
そういったら、もっと驚かれた。
皆集まり、「いただきます」をするとメイがまたまたビックリ！
ははっ、でもこれって私いつもやっているはずなんだけど・・・。
こういうとこで、国の違いって出てくるよね。
メイに「だいじょうぶ？」って聞くと
「うん、平気。なんかこのお屋敷だけ別の国みたいね。」
って言われた。
すると、
「確かにそれはあるかもね。」
「俺自体日本人だし、生活スタイルをこっちの国に無理に合わせた
くないって言うのもあるし、
夕美には普段外で気を張っている分、この家に来たらのんびりして
ほしいからね。」

それを聞いたメイは、「良かったね」ってほほ笑んでくれた。
「うん！」
「お兄ちゃんも、ありがとう。」
「どういたしまして。」
「ほら、早く食べないと・・・町へ買い物へ行くんだろ？」
「はーい」
そのあとは、黙々と食事をしてどうにか食べ終わり、一休み。
すると、先輩から声がかかった。
「ねぇ、今日2人で町へ出かけるの？」
「そうですけど・・・。」
「2人だけじゃ危なくない？」
「いや、別に。」
「そうだ、私も一緒に行くわ！良いわよね。」
「先輩は、とりあえずお兄ちゃんに聞いてみてください。」

すると、お兄ちゃんがちょっと困った顔をしながらやってきた。
たぶん頼みこまれてんだろうな～。
「今、メイちゃんの弟さんに連絡したからちょっと待っててくれる？」
「本当は、俺が行くのが良いんだけど・・・」
「（あの馬鹿王子に呼び出しくらってるし・・・くそっ！）」

シラト君が来ると、「呼び出してごめんね」
とお兄ちゃんとシラト君が話始めた。
「イエ、別にかまいませんがどうかしました？」
「ちょっと、護衛をお願いしたいんだけど。」
「護衛？俺なんかでいいんですか？」
「あっうん。ただ男がいたほうが安心でしょ？町歩くのに。」
「やっぱ、心配性ですね～。町ぐらいよっぽど変なとこ行かなきゃ平気でしょ。」

「君の大切なメイちゃんも一緒だけど（笑）・・・。」
「護衛お受けします！！」
「相変わらずだね～」
「お互い様です！」
「あっ、ちなみに今回は、王子の大切な人も一緒だから宜しくね♪」
「もしかして・・・だから呼ばれたんでしょうか。」
「当たり！だって何かあったら俺の責任になっちゃうじゃん。いくら本人から言いだしたことでも」
「はぁ～、解りました。」
「日当払うからメイに町で何か買ってあげれば？」
「ありがとうございます♪」

「あの～お話のほう終わりました？」
「あっ、ユミさんお久しぶり！」
「この間はありがとございました♪」
「お兄ちゃんとシラト君って知り合いだったんだ。」
「あぁ、ユミの事宜しくってお願いしに行ったんだよ。」
「一体どこまで言いにいったの？」
「忘れちゃった☆」
はぁ～
「それで、シラトと仲良くなって時々ね。」
「そうです」
「そっか、よかった♪お兄ちゃんの事宜しくね」
「はい。」
「あっお兄ちゃんシラト君に先輩の事紹介しなくて良いの？」
「そうだね」
「麻耶さ～ん、ちょっと来てくれる？」
「こちらマヤさん。王子の婚約者だよ。」
「へぇ～この方が。いまはまだ非公開なんですよね。」
「そうなってるね。」

「解りました、今日一日護衛を務めるメイの弟のシラトです。宜しくお願いします。」
「こちらこそ、宜しくね。」
紹介を終えて町へ。

町へは、徒歩３０分。
お兄ちゃんのお屋敷からはそんなに離れて無いらしい。
この屋敷って結構好条件な場所に立ってるんだね～♪
行くときに、お兄ちゃんからこの前渡したお金で皆でご飯ってわけにもいかないだろうから
これでご飯食べてね☆ってまたお金渡された。
めちゃくちゃ甘いお兄ちゃんでした。

「いってきま～す。」って言うと、
「変なおじさんやお兄さんについて行かないようにね。お菓子諸々とかもらっても駄目だからね～～。」
「あと、変な暗い道とかに行かないようにね！」
など、注意事項がわんさか飛んできた。
最後にやっと、「じゃ、行ってらっしゃい」
と、送り出してくれた。
屋敷でのんびりできたけど、出発で疲れた気がする・・・。

買い物

町に着くと早速買い物。
まずは、服屋さんに入りメイや先輩に見てもらいながら購入。

メイに教えてもらいながら初めてこっちの世界のお金を使った。
お金は、全部コイン。
ドッカの外国のように銅貨、黒貨、銀貨、金貨とあった。
そしてそのコインたちが一般に使われているらしい。
日本円で
銅貨＝１０円
黒貨＝１００円
銀貨＝１０００円
金貨＝１００００円
って感じで１円や５円がこの国に存在しないので基本的に、買い物していても端数にならず、
支払いのとき気を遣わなくて良いことが分かった♪

一方護衛として付いてきているシラトくん。
どこの世界でも、女の買い物に付き合わされている男は待ちぼうけが鉄則らしく店の外で
突っ立って待ってます。

一通り買い物が終わると
待ってましたと言わんばかりにとびきり笑顔になり「お昼にしよう！！」と張り切りだした。
よっぽど、退屈していたらしい。
シラト君はメイと腕を組み歩き私たちもその後ろを歩く。
「この辺でおいしいところしってる？」

2人に聞くと、
「いつものとこで良ければ。」
そう言って、近くの庶民的な食堂へ案内してくれた。
「こんちは〜」
「いらっしゃい！！」
でてきたのは、恰幅のいいおばさん。
「ランチ頂戴！」
「はいよ！」
「皆ランチでいい？」
「私はいいよ？先輩は？」
「私もそれで。」
「じゃ、みんなランチで。」
「ちょっと待ってて。」
注文し、少しするとおいしそうなランチがやってきた。
「お待ちどうさま。」
そう言って、おばさんは厨房のほうに戻り
私たちは、食事をはじめた。
たべてみると、
「おいし〜！」とつい言ってしまうほどおいしかった。
「そうだろう！ここには、俺もメイも町へ来るたびに寄るんだ！！」
とシラトは胸を張って自慢げに話していた。
そういうシラトは、なかなか可愛いもんだ♪
メイもきっと同じことを思っているんだろう。
シラトの頭をニコニコしながら撫ぜ回していた。
そして先輩もシラトくんに癒されたのか、顔がニコニコしてますよ？

買い物（後書き）

おはようございます。
〜コインについて〜
黒貨って言うのは私の想像でした。
銅貨、銀貨、金貨だけではちょっと不安だったものでつけたしました。

食事を食べ終えると、また買い物スタート！
色々なお店を周り、買い物をしていると結構な荷物に。
この辺でやめておこうと、後ろにいるみんなに声をかけようとすると
あれ？
買い物に夢中だったせいか、いつの間にかはぐれてしまった。
周りを見ても、メイたちらしき人はいなく、私はメイたちを探すこ
とに・・・。
「めい～」「せんぱい～」「シラトく～ん」どこ行ったんだろう。
キョロキョロしながらフラフラとあちこち探しているうちに、すっ
かり夕方に・・・。
「あぁ～夜になっちゃうよ～（泣）どこ行ったの？みんな・・・。」
ぼそぼそと嘆きながら探し歩いていると、腕を引っ張られ知らない
道へ。

「お譲ちゃん、こんな時間に何してるの？」
声をかけられ顔をあげると、知らない男が3人。
「お譲ちゃん1人？」
「おじちゃんたちと遊ぼうか？」
などと、男たちに話しかけられ、
「結構ですから、離してください！！」と腕をぶんぶんと振った。
すると、腕を持った男の手の力が加わり、もう一人の男が反対側の
私の手をつかもうとした。
さすがに、両手を束縛されるのは御免だったので、サッとよけた。
すると、よけられた男が「っち」と舌打ち。
「離して！！」
「離すわけないじゃん」
「痛いでしょ！」

そう怒鳴ると、少しだけ力が弱くなった。
ふぅ～、さてどうやって、逃げよう・・・。

『こんにちは。何してるの？』
あれ？この声。
『ここだよ、男たちの後ろ。』
あっいた。
『どうしたの？逃げたいの？』
「そうなの」

『じゃ、契約しよう。』
「けいやくって何？」
『ただ、これから渡すペンダントをなくさず肌身離さず持っていてね。』
「うん！わかった」
『その前に助けてあげる』
「ありがとう」

この前の少年がいつの間にか男たちの後ろにいたと思ったら、私の前にやってきた。
そして、スッと男たちを睨み手を横に振ると、あっと言う間に男たちは吹き飛ばされ
頭をぶつけたのか、気を失っていた。

「はい、これ失くさないでね？」
「うん解った。助けてくれてありがとう。」
そう言って、ペンダントを首に着けた。
「そういえば、君すごいね。名前は？」
「名前？う～ん忘れた。つけ直してよ。」
「えっ、もしかして記憶喪失？」

「ちがうよ、長く生きてて忘れたの。」
「なにそれ～。」
「僕は、精霊だからね。」
「精霊ってじゃ、光耶ちゃんと一緒なんだ！」
「光耶？」
「うん！お兄ちゃんとこにいる光の精霊ちゃん。」
「へぇ～」
「今度一緒に会いに行こうよ」
「いいよ」
「それより名前だったよね、う～ん」
「ちなみに、君は何の精霊」
「風」
「じゃ、風耶君ね」
「いや君はいらない、風耶でいい。」
「じゃ、風耶」
「あぁ、宜しく」
「こちらこそ、宜しくね。」

風耶（後書き）

おはようございます。
いつも読んでいただいてありがとうございます。

タイトルですが風耶で〔フウヤ〕と読みます。
文中に何度か出てきますが、すっかり忘れてました。
ゴメンナサイ（汗）

風耶2（前書き）

こんにちは。
いつも読んでいただいてありがとうございます。
今回は、短いです。

風耶2

「そういえば、さっき風耶(フウヤ)の声聞こえたけど、フウヤの口動いて無かったよね。どうして？」
『もしかして、これの事』
「そう、それ」
『思念だよ。思ったことを念じて相手に伝えるって、そのまんまか。もし聞かれたくない内容とかの場合は、ただ思ってみて。通じるから』
『ホント、今通じているの？』
『通じているよ』
『すごいね！って、あっ、友達探さなきゃ！！』
「友達？迷子なの？」
「そう、はぐれちゃって・・・ずっと探してたの。」
「じゃ、僕が探してあげる。」
「いいの？」
「うん。」
そういうと、ちょっと待っててと言われ走って行ってしまった。

数分後、いつの間にか後ろにいて、
「見つけたよ！！」とメイや先輩、シラトくんを連れてきてくれた。

「どうやって、見つけたの？」と聞くと
「ちょっと高いとこから、仲間に聞いた。」という。
何時間も探し回った私としては、すごく助かった。

「メイ、先輩ゴメンナサイ。」
「もう、どこ行ったか心配したじゃない！！」
「ずっとみんなで探してたのよ。」

「本当にごめんなさい。」
私は、はぐれて迷惑かけてしまったという思いで、ただひたすら謝ることしかできなかった。
そして、メイたちを見つけてくれた風耶には、すごく感謝の気持ちでいっぱいだった。
「風耶も、メイたちを見つけてくれて、ありがとう。でも良くメイたちだって判ったね。」
「言ったろ。仲間に聞いたって。」
「そっか。」
そう言いうと、帰りながらみんなに風耶を紹介し、仲良くおしゃべりしながら帰った。

番外編1　（前書き）

ちょっとばかり、スラスラいかなくなってきたのでここ等で一休みしたいと
思います。

夕美&メイが仕事する前の
お兄ちゃんの奮闘？おせっかい？心配？兄心？そんな感じです。

番外編1

アンさん家にて。

夜、アン・ロイック夫婦は、普段通り夫婦仲良く家に帰ってきた。
アンは、夜食の支度。
ロイックは、お風呂を沸かす。
小さな家だけど、住み心地の良い2人にとって大切な家だった。

そんな家に訪問客が1人。
コンコン。
こんな夜にドアをノックする音が・・・。
普段訪問客なんて、休日にならないとやってこない。
とても珍しいことだった。

「はいはい。どなた？」
ドアを開けてみると、上から下まで黒を身にまとった男。
2人ともこの男とは知り合いで時々城内で立ち話などをしてたりする仲だった。

「こんにちは。」
「これはこれは、こんな夜にいかがなさったんですか？」
「すいません。こんな夜に押しかけてしまって・・・」
「それは、いいんですが。とりあえず中へどうぞ？」
男を中へ入れると、家の中にいた家の主人(ロイック)が
「こちらへどうぞ。」
と椅子を勧めてくれた。
「で、どうしたんですか？」

「じつは、お二人にお願いしときたいと思いまして。本当は明日の朝でもよかったんですが
それだと、遅いかと思ったんで、こうしてやってきてしまいました。」
「「お願いとは？」」
「アンさんは、もうすでにご存じかと思いますが、俺の妹が明日からお二人にお世話になるんで
宜しくお願いしたいと思いまして。」
「そんなことでしたか。」
「私のほうは、メイの相棒がみつかってホッとしております。後は
2人がなかよくやってくれれば
問題ないと思いますよ？」
「私も、妻と同じです。」
「メイという子はどういう子でしょうか？」
「とてもいい子ですよ。」
「そうですか。」
「お二人が言うんだから大丈夫そうですね。」
「「ええ」」
「よかった。」
「では、最初のほうは馴れない仕事でお二人にご迷惑かけると思いますが宜しくお願いします。」
「わかりました。」
「すいません。ちょっと長居したようで、そろそろ失礼します。」
そういうと、男は立ち上がった。
外へ出ると、アンとロイック夫妻は見送ってくれた。
「カズキさん、あすから妹さんお預かりしますね。」と、アンさん。
「お気おつけてお帰りください。」と、ロイックさん。

カズキが帰った後、2人して顔を見合わせ「やっぱりカズキはお兄ちゃんなのね～♪」

と2人にクスクス笑われていたのは、カズキ自身知ることはなかった。

王子の中身

あれから数日後、王子から呼び出し。
もちろんお兄ちゃん経由で。
仕事が終了するとメイと別れお兄ちゃんに連れられて王子の部屋へ。

すると、一言「よく来たな、とりあえず座れ。」
「なんの御用ですか？」
何気なく質問すると、
「お前、精霊と契約したそうだな。その姿見せろ。」
といきなり言われた。
お兄ちゃんに目線で助けを求めたら首を縦に振られた。
しかたがなかったので、風耶に問いかけた。
『風耶聞こえる？』
『聞こえるよ？』
『どこにいるの？』
『僕はいつもユミの周りに居るよ。』
『さっきの話聞いていた？』
『うん。けどいやだ！』
『いやなの？』
『いやだ！僕はでていかないよ？ごめんね。』
『風耶がいやなら仕方無いよ。』
「お兄ちゃん、風耶いやだって。」
「なら仕方ないか。」
それを聞いてた王子は、
「お前本当に精霊と契約したのか？いい職に就きたくて、嘘ついたんじゃないか？」
と私の事を馬鹿にすると、いきなり部屋の中に突風が起こり部屋がめちゃくちゃに。

私とお兄ちゃんは光耶ちゃんに守られ何ともなかったけど、王子は突風に巻き込まれ壁に激突！

人間見た目だけじゃなくて、中身も大切としみじみ思った瞬間だった。

王子と精霊

少し落ち着くと、今度は「ならお前の職を変えるか？」
と言いだした。
ホント身勝手な王子だ。

「俺の補佐と、おれ付きのメイドどっちかにするか。」
「するかって、勝手に決めないでよ！」
「じゃ、どっちにする？」
「どっちも遠慮します！今のままがいいし、第一またメイが1人になっちゃうじゃない！！メイ一人で
2人分の仕事させる気？」
「お前、仮にも王族なんだから城で働いている者の事ぐらい把握しとけよ～。」
「兄妹そろって生意気だな。」
「「兄妹だからね。」」

「だいたい、なんであんたの周りで働くの？」
「それは・・・、」
「それはね、もともと風耶は王子と契約する予定の精霊だったんだよ。それが、いざ契約って時に精霊に逃げられてププっ♪
な～んか男女のもつれみたいな話だよね。」
「笑うな！！あいつが悪いんだよ！いきなり消えやがって。」
男女のもつれね～『風耶って男の子だよね～』
『そうだよ』
『じゃ、なんで逃げたの？』
『逃げたんじゃないよ？ひどいな～君のお兄さん知っててからかっているんだから。』
「おにいちゃん、からかってるの？」

「あっばれちゃった？」
ぺしっ、
お兄ちゃんの頭を軽くたたくといい音がした。
「夕美痛い～♪」
「本当は？」
「本当はね、王子と精霊の相性が悪かっただけ。」
それを聞いた王子は目をぱちぱち。
「知ってたな。」
「うん。光耶に聞いてたから。」
すると、王子は「クソッ」と近くにあった椅子に八つ当たり。

私は、理由が分かったならもういいかな？なんて思って
お兄ちゃんに「もう帰ってもいいかな？」
って言ってみると、
「まだ用事が終わって無い」と王子。
「どのような用事ですか？」
「お前の職について。」
今のままでいいのに～。

王子と精霊（後書き）

おはようございます。
いつも、読んでいただいてありがとうございます。
相変わらずの下手な文（子供じみた文）で申し訳ありません（汗）
こんな文でも、少しでも楽しんで読んでいただければと思います。

相性と職（前書き）

おはようございます。
今日は、こちらただいま雨です。
涼しいです♪。

さて、前回から引き続き王子とお兄ちゃんと夕美&風耶でお送りいたします（笑）

相性と職

「精霊との相性って大事なの？」

「光耶が言うには、結構大事らしいよ。王子の例で言うと、もともと相性が悪くて見えてたり見えなかったりしてたのが契約するときも、風耶が逃げたんじゃなく王子が風耶を見えなくなったんだって。」

あら～大変だったね。

『だから、ユミが来るまで退屈だったよ。ユミのおかげでそんな退屈な日々も過ごさなくて済むようになったけどね♪』

じゃ、私との相性は良かったわけだ。

良かった。

「で、どうして職を変えなきゃいけないんですか？」

もともと、お兄ちゃんや王子のススメで始めた仕事だったのに。

「元々、俺が契約しようとした精霊だ。なるべく俺の下で働いてもらいたい。何なら結婚でもいい。」

「「却下！！」」

『我がままでしょ？』

『そうだね。』

風耶と私の王子に対する意見は一致しているようだ。

「ユミを貴方と結婚させるぐらいなら、ユミと俺は隣国へ逃亡しますよ！」

「わかった。とりあえず、今はあきらめる。」

「今だけじゃなく一生あきらめてください！」

この時、お兄ちゃんが居てくれて本当に良かったって思った。

結婚なんて、冗談じゃない！一体この王子何がどうしたんだ？
この前まで先輩にプロポーズして、一生懸命アプローチしてたのに。

そんなことを考えていると、お兄ちゃんは
「とりあえず、夕美は俺と一緒の職業ね。あっ俺一応この国の軍に所属してるから。」
と言った。
お兄ちゃんと一緒の職業＝魔導士
「でも、私魔法なんて使えないよ。」
「大丈夫だよ。風耶もいるし、俺も教えてあげるからね。」
「でも、そしたらメイは？」
「それなら、大至急代わりの者を手配する。」
そう言って、王子はいったん部屋から出ていった。

相性と職（後書き）

１話目を、読み返してみるといつの間にかセリさんから王子に代わってた！！

とりあえず、このままいっちゃお～♪

気が変わったら、また少しずつ手直し始めるかもしれないデス・・・。

お引っ越し。（前書き）

おはようございます。
やっと、抜け出せました。
王子との話し合い？

お引っ越し。

しばらくして王子が帰って来た。
アンさんにメイの新しい仕事相手の事を伝えたようだ。
そして、ついでに私の事も。

「アンには、お前の事を伝えたから今日から軍の寮へ入れ。」
とイキナリ言われた。
いきなり今日ですか・・・。

「別に軍に所属するからって、寮に入れなくても俺の家にくれば良いじゃないか！部屋も余ってるし。」
「駄目だ！！マヤが嫌がっているんだ。そんな事出来るか！」
さっきは、私に結婚ほのめかしたくせに・・・。

まぁ先輩と買い物行くほどの仲になったって事は、まだこの王子知らないんだよね。きっと・・・
とりあえず、
「先輩とは、この前買い物一緒に行きましたけど？」
とちょっと反抗。
「そういえば、そうだったね。帰ってきてから少しづつユミの事も話してくれるようになったよ
仲良くなれたんだね♪」
お兄ちゃんも援護してくれて、
「しっしかし・・・」
「2人仲良くなったんなら問題ないですよね（笑）」と、王子が反論する間もなくたたみかけ
了承をえた。

そして、「じゃ、早速引っ越しはじめちゃいますね！それでは、失礼します。」と、
お兄ちゃんと私は、退室し早速荷物をまとめに向かった。

メイと私の部屋に着くと早速荷物をまとめる。
この間買った、大きめな袋に荷物を次々に詰めていく。
この間買い物をしたと言っても基本的にまだまだ私の荷物は少なく袋2枚にまとめただけで済んだ。
これなら、持って帰れそうだ。

そして、荷物をまとめ終わると、メイに事情説明。
風耶とは以前会っていたのでお互い顔見知りなので特に驚くこともなかった。
ただ、仕事と生活が一緒に出来なくなるということが寂しいと言ってくれた。
私もメイは、この世界で初めての大切な友達で仕事仲間からメイと離れるのは寂しかった。（本当は仕事も辞めたくなかったケド・・・（泣））
「仕事仲間でなくなっても友達でいてくれる？」と聞くと、
「もちろん！」と笑顔で言ってくれた。
またお互い休日に遊ぼうと約束をして、お兄ちゃんの家に向かった。

キリト（前書き）

やっと出てきました。（汗）
でも、紹介だけで終わりです。今回は・・・（泣）

キリト

家に着くと、早速光耶ちゃんがお部屋へ案内してくれた。
今度は、客間ではなく先輩の隣の部屋。
先輩ものぞきに来て、３人でおしゃべりをしながら荷物を整理した。
先輩は、今ではすっかりとげとげしい感じが無く仲良くなれた。

一方、光耶ちゃんと風耶と言えば、初対面！
部屋で紹介したんだけど、どうやら知っていた様子。
ただ、名前がお互い違っていただけで・・・。
２人は、見る限り仲が良いって感じでもなければ、悪いって感じでもなかった。
まぁ、最悪な仲じゃなければいいのかな？

次の日、相変わらずの光耶ちゃんのおいしい手料理を朝から食べて
お兄ちゃんと城へ。
今日は、仕事が違うので庭に向かわず演習場へ。
そこには、軍に所属している騎士の人たちがもう鍛錬を始めていた。

「すごいね～。」
「ほんとにね～。」
「お兄ちゃんも、毎朝こんなことしてるの？」
「してないよ☆俺たちはしなくていいからね♪」
「良かった。」
「その代わり、勉強を頑張ろうねｖ」
「・・・はい。」

そっか、勉強があったっけ（汗）
せっかく、学生じゃなくなったのにな～

なんて考えていると演習場のほうから、お兄ちゃんのほうに歩いてくる男の人が。
背がお兄ちゃんよりも高くて迫力のある人だった。
だけど、この人も見た目カッコいい。
あっちの世界では、こうも頻繁にカッコいい人がいなかったケド
こっちでは、カッコいい人率上がっているのか？
なんにせよ見るだけならタダだ？！
目の保養だな～♪

私がニコニコしてると、その男の人は変な顔をしてちょっと離れた。
「これ何」
と男の人は私に指を指しながら、お兄ちゃんに話しかけると
「妹の夕美っていうの。可愛いでしょ？今日から俺と同じ魔導士として軍に配属されたから
ヨロシクねv」
私も、
「夕美です。宜しくお願いします。」と頭を下げた。
すると、
「キリト＝ラドリー、宜しく。」
「ラドリーってアンさんと同じですね♪」
「あぁ、母さんだ。」
「信じられないよね～、あのほのぼの夫婦からこんな息子が生まれてきて（笑）」
「そうか、母を知っているのか。」
「それだけじゃないよ？夕美も、ロイックさんにもお世話になったからね」
「ちッ父もか！」
「これで、キリトにもお世話になるから家族みんなにお世話になるって訳かな？」

「でも、お前ら騎士じゃないからそんなに俺と接点ないだろ？」
「でもまぁ、これからあるかも知れないし？」
ポンポンとキリトさんの肩をたたくお兄ちゃん。
「とりあえず、妹の事ヨロシクねｖ」
「わかった。」

日の当る場所と高い場所

キリトさんは騎士の中でも隊長に所属しているらしい。

軍の中で隊長は４人
その隊長たちをまとめているのが総隊長
ちなみに、キリトさんは第二隊長だった。
そして、お兄ちゃんは騎士ではないけど一応第一副隊長として所属していた。
私も、第二隊の副隊長として所属することになった。

なんで副隊長かって？それは、私とお兄ちゃんが魔導士として軍に入ったから。
じゃ、副隊長はみんな魔導士なのか？って聞くとそうではないらしい。
なんでも精霊と契約しなくても、魔法って使えるらしいよ？猛勉強すれば・・・
だから、副隊長さんや、隊長さんはある程度は使用できるらしい。
ただ、私とお兄ちゃんは風耶や光耶が居るから（ある程度）じゃ済まないと、いうことで
いきなり副隊長になっちゃいました（笑）

では、隊のみなさんと初顔合わせ＆自己紹介
と思ったんだけど、みなさん引き続きお仕事っぽかったのでとりあえずお兄ちゃんに仕事の説明をしてもらうことに。
お兄ちゃんに駆け寄り、「で？」と聞くと
「あぁ。」と納得してくれた。さすがお兄ちゃん。
「俺たちの仕事は、光耶や風耶と一緒に城外からの侵入者の警戒と排除。

あとはテキトーに隊のオシゴト♪」
「それができれば俺たちは何していてもいいんだよ？ということでとりあえず、魔法のお勉強するために
図書室いこっか♪」
ということで、本を借りに図書室に行くことに。
本を借りた後は、光耶ちゃんは光が差すところ、風耶は高いところということで、城内にある庭の一部の
丘に行くことになった。

「ねぇ、なんで光が差すところとか高いところなの？」
とお兄ちゃんに聞いてみると、
「それぞれ属する場所に
噂好き小さい仲間がたくさんいて、その子達が噂を光耶や風耶に教えてくれている。
その噂が情報なんだよ。でもその噂を聞ける場所が光耶は光がさしている場所、風耶は高くて風が吹いている場所って限られているけどね。」
「いちいち場所を探すの面倒そうだね？」
「でも、風耶も光耶も恵まれているほうだよ。風と光なんて風の強い日とかよく晴れた日とかだったら
高い場所行かなくて済むし。」
「そういえば、そうか。」
なんて言っているうちに、丘にたどり着いた。

日の当る場所と高い場所（後書き）

おはようございます。
いつも、読んでいただいてありがとうございます。

小さな侵入者

丘にたどり着くと、早速図書室で借りてきた本を広げ勉強開始。
もちろん、侵入者を警戒しながらですが・・・。
侵入者が城内に入ってくると直ぐに光耶ちゃんや風耶に知らせてくれるそうなのであまりお兄ちゃんも気にしてないようです。

本を広げ見てみると、そこには魔法（初心者向き！）と1ページ目に書かれていた。
「お兄ちゃんふと思ったんだけど、こっちの世界の言葉読めたり喋れたりするんだね。」
「もちろん！夕美が日本語で書いているつもりでもこっちの言葉に勝手に訳されちゃったりもするよ♪
すごいだろ☆」
「べんりだね！コレって先輩もそうなの？」
「もちろん。なんて言ったって僕が召喚したんだから。」
「お兄ちゃんすごいね。」
「だろ。」
「うん！」
「じゃ、勉強しようか。」
ほのぼのから一転、早速勉強開始です。

私は、風耶と契約しているということで風属性の魔法中心に勉強した。
1、小さな小石を浮き上がらせること
2、植木鉢を落とさずに運ぶ
3、大きな石を運ぶ
「って運ぶことばっかりでしょ～」突っ込んだら、初心者だしね（笑）って言われた。

確かにそうだよね・・・。

1がようやっとクリアーしたときちょうどお昼の鐘がなった。
「休憩しようか。」とお兄ちゃんの一言でランチタイムに。
お昼は、光耶ちゃんが作ってくれたお弁当。
何でも、今は交代で食堂行ってもいいけど私がいなかった時は、交代も何もお兄ちゃん1人だったから離れられなかったそうだ。
食堂行っている間に何かあっても困るしね。
食堂のお昼もおいしかったけど、光耶ちゃんの料理も最高だよね。

メイは今頃、休憩入ったころかな？
今度のメイの相方いい人だといいな。
と思いながらお昼を食べ終え、ちょっと休憩していると風耶が難しい顔。
きれいな顔立ちが難しい顔しているとちょっとおっかないよね。

「どうしたの？」と風耶に聞くと、「「侵入者」」と風耶と光耶ちゃん二人そろって答えた。
「夕美の初仕事だね。じゃ、いこっか」

連れられて、行ってみるとそこにはウサギ。
「可愛い侵入者だねｖ」
「そうだね。じゃ、山へ帰してあげようね。」
よくよくウサギが侵入してきた経路を見てみるとそこには、穴。
城壁に小さな穴が開いていた。
「いくら人間が通れなくてもコレまずいよね。」
「そうだね。とりあえず、面倒だからキリトにテキトーに報告しておいてね。」
「解ったよ。」
と返事をして、また小さな穴からウサギを返してあげた。

もちろん穴には、そこらへんに転がっていた木の板を立ててておいた。

起こし方（前書き）

いつも読んでくださりありがとうございます。

どおでもいいことですが、サブタイトルのつけ方はテキトーです。

起こし方

夕方、帰る前に第二隊執務室へ
この軍では各隊に執務室があり、仕事で派遣されていない時や演習場にいるとき以外は、だいたいこの執務室に居るらしい。

とりあえず、お兄ちゃんから「キリトへ報告宜しくv」ということだったので、入って正面にあるキリト隊長の机に向かい、「あの～」と声をかけてみた。
キリト隊長は・・・寝てた。
机にうつ伏せになって。
「キリト隊長、起きてください。キリト隊長！」ゆすっても起きなかった。
『ねぇ、せっかく魔法の練習したんだから、復習ってことで隣にあるちょこっと分厚い本を頭の上から
落として起こしてみれば？』
という、小悪魔の囁き・・・もとい風耶の助言で早速試してみることに。
「う～ん」だんだん本が持ち上がり今のところうまくいってる。
「えいっ」ばたっという、本と隊長の頭の当った鈍い音がした。
それと同時に、「痛っ」という隊長の声も。
「おはようございます（笑）」
「オハヨウ」
「お前かこれやったの」
「はい！やっと起きてもらえましたか？」
「普通に起こせ！普通に！」
「最初普通に起こしていたんですけど、起きてもらえなかったんですよ～。」
「それで、何の用だ」

「あっそうだ！えっと今日とっても、可愛い侵入者が入り見に行ったんですけど、特に害のない侵入者でして帰したんです。でも城壁に穴があいてたんで報告に来ました。」
「そうか・・・トトカこいつに案内してもらって城壁の穴を明日ふさいで来い。」
「そういうことだから、明日は朝来たらこちらに来てトトカを案内してくれ。」
「わかりました。」
ということで、明日は朝から執務室へ直行です。

修復（前書き）

オハヨウございます。
いつも読んでくださり、ありがとうございます。

修復

次の日隊長に言われた通り朝、お兄ちゃんたちと別れ執務室へ直行した。

簡単な自己紹介をお互い済ませた後、早速案内しようとすると
「今、道具持ってくるから数分だけ待って」と、言われ待っていると何やら色々と道具を抱えて来た。

トトカさんと言う人お父さんが町で左官業を営んでいるそうで、
城壁にちょっとした何かあるたびに
トトカさんが繰り出されるそう。
ちなみに現在トトカさんの実家では、お兄さんが後継ぎとして修業中だそうだ。
まぁ、そんな雑談を聞きながら穴の空いた所を案内していた訳だけど、
話をしているとあっと言う間に着いてしまった。

「ここです。昨日ここからウサギが入ってしまって・・・修復お願いします。」
「お安いご用です。」
そういって、トトカさんは持ってきた道具を使い器用に穴の修復をはじめた。

私は、トトカさんの邪魔にならないようなところに腰をおろし仕事を眺めていると、
「小石集めてほしい」と言われテキトーな大きさの石をそこら辺から集めていた。
すると、やっぱり風耶が『昨日の復習しよう♪』と言い始め、魔法

で石を集める事に。
最初は、馴れなくてちょっと手間取ったが、回数を重ねていくうちに馴れていきあっという間に集めることができた。

「これだけあれば、ふさげるね。」
そう言ってトトカさんは、小石を詰め始めた。

ある程度ふさぐと今度は土と水を混ぜたものを持ってきた。
コレって、あっちの世界でいうコンクリートようなものだよねきっと。

それを、石と石の間に詰め込み平らにする。
1日乾燥させてもうひと塗りすれば出来上がりだそうだ。

丁度お昼ちょっと過ぎに終わり、トトカさんは食堂へ
私は光耶ちゃんのお弁当目指して、昨日と同じ丘へ向かう予定なので、
トトカさんに穴の修復してもらったお礼をいってそこで別れた。

情報（前書き）

おはようございます。
いつも読んでいただいてありがとうございます。

情報

壁の修復も無事に終わり、いつものようにお兄ちゃんたちと丘にてただいま勤務中・・・
いえ、私はただいま勉強中デス。

相変わらず、教えてもらいながら勉強をしています。
あれから何度か実践し少しは使えるようになってきたけどマダマダ相変わらず

壁の補修が終わったあの日、家に帰ってみると
お兄ちゃんに用事があったらしく、家に隊長が来て
2人でお兄ちゃんの部屋へ直行してしまった。

私も、自分の部屋に戻ていたから2人がどんな話をしたか判らなかったけど、
次の日聞いた話によると、今度第二隊が隣国へ王子と共に訪問することになり、
とりあえず、過保護なお兄ちゃんに報告ということで今日は来たそうだ。

まぁ隊長の本音を詳しく聞くと、ただ光耶ちゃんの酒のつまみが恋しくなったって事らしい（汗）
そして、光耶ちゃんのおつまみをたらふく食べて、夜も遅いということでその日は泊まっていった。

・・・そして、「今度、お兄ちゃんと離れ隣国に行くならもっと勉強しなきゃな！！」
ということで、なぜか過保護さがスパルタに変化しつつある今日こ

の頃。
私としては、風耶もいるから『いざとなったら風耶お願いねv』と他人任せな事を思いつつ勉強に励んでイマス。

初めての隣国ということで、
そういえば国の情報教えてもらってなかったな～と思いだし、勉強ついでに
お兄ちゃんから教えてもらいました。
やっぱ、自分の住んでるとこぐらい知っておいたほうがいいよね♪

この国はイートラ国と言うらしい。
割と自然の多いほのぼのとした国で王・王妃の間には、2人の子が授かったらしい。
そして、私の知っているあの我がまま王子は、次男いわゆる第二王子長男元後継者は？と言うと、本当はお見合い結婚してお嫁さんもらうはずが、幼馴染と結婚してしまったらしい。
その幼馴染というのが、隣国のお姫様で一人娘。
「ソッチには、男2人いるから1人頂戴♪」ということで、お婿さんにいっちゃいました（笑）

隣国について、
隣国隣国と言っているけど、隣接している国は2か所
そして今回の訪問先は、我がまま王子の兄のいる国
ハタラージ国
こちらの国は、イートラ国と違い発展していて自然が少ないぶん建物が多いとか。
とりあえず、「行って見て楽しんできなよ♪」と言われた。

情報（後書き）

やっと、国の名前出せた～！
いつも、いつだそうかと考えていたのですがこんな遅くなていしまいました。
そんな、もったいぶるような名前でもないのに・・・。
これでこれからは、〝こっち〟や〝あっち〟という言いかたをやめられます。
よかった。

訪問

当日になり王子は馬車に乗り、私たち第二隊は馬で王子の馬車を護衛しながら出発。
こんなこともあろうかと乗馬も少しづつ練習してました。
イエ本当は、無理やり隊長が「教えてやる！」と言って、隊長の特訓を受けたんです（泣）

第二隊は、隊長や私、を含め１５人ほどの小隊。
ほのぼのとした雰囲気で、まだ転職してきて間もない私でさえも優しく受け入れ接してくれる
そういう２０代～３０代の庶民的な隊、イエ決して貴族な方がいない訳ではないんですが・・・。

ハタラージ国までは、馬で１日。
途中村の宿に泊まり、宿ではもちろん酒盛りが始まっていた。
お酒が飲めない私は夕食を食べた後早めに引き上げ、暇だったので風耶とおしゃべり。
次の早朝、宿を出発しやっと着いた。

訪問先のハタラージ国の城へ到着しまずは各自部屋へ案内された。
部屋は、基本２人１組１人余るけどそこはテキトーに何処かに３人に。
ちなみに私は隊長と同じ部屋。
いくら仲が良くてもやはり年頃の男女を部屋に二人きりというのは心配というのと、私が一応
副隊長と言う役柄なので、隊長と同部屋らしい。

荷物を置くと、私は着替えるためバスルームへ

一応小さいけど各部屋にお風呂がついているようだ。
隊長が同じ部屋にいるため私は着替えを持ってバスルームに入った。
馬に乗るため動きやすい服装（ズボンと上着）だったので、お兄ちゃんが最近転職祝いに作ってくれた
黒いワンピースとローブに着替えた。

着替えが終わり隊長に声をかけると、広間へ移動
広間へ着くと、そこにはあの我がまま王子に似ている人が王座に座っていて隣にはおっとりした美人さんがニコニコしながら座っていた。

私たち第二隊は王子の一歩下がって後ろに着いた。

困りごと（前書き）

おはようございます。
いつも読んでいただきありがとうございます。

困りごと

「アン兄上にアナベラ義姉上お久しぶりでございます。」
「大きくなったね～♪」
「ホントに。お久しぶりですね～」
この会話だけで、すごくのんびりした夫婦だと思ったのは私だけだろうか？
「わざわざ来てくれてありがとう。とりあえず今日のところは部屋に戻りゆっくり休んで。
後ろの君たちもね♪」
「「はい」」

「あっセリ、明日話したいことがあるから楽しみにしてて！」
アンリッシュ王に、言われたことがわからない王子はちょっと首をかしげながら部屋に戻って行った。
私たちも、王子に続き王様と王妃様に一礼をし部屋へ。

隊長と同部屋になたが、隊長がそれなりに気を使ってくれているのか、
初日からのんびりと過ごすことができた。

翌日、昼過ぎ王様に呼ばれた王子が隊長と私を連れ広間に向かった。
広間に着くと、アンリッシュ王とアナベラ王妃そして右隣りに女性
私と隊長は昨日と同じように王子の後ろに整列し、
王子は一歩前に出て王様と王妃様に挨拶。
王様は本題に入った。
「昨日はよく眠れた？昨日話したい事があるっていったよね？実は、右にいる女性の事なんだ。」
そういって、右の女性に一歩前に出るように促した。

「この女性(ヒト)はね。実は私たちが結婚する前に見合いした女性なんだけど、もしよかったらセリにどうかなって？」
「どうかなって、僕何も聞いてませんが？もしかして今回の訪問ってこのため？」
「わかっちゃった？」
「わかっちゃいました。」
あきれ果てた王子は、
「残念です。まだお披露目してないから兄上知らないんですね！実は僕婚約してます♪」
さも、嬉しそうに言った。
「うそ！！」
「イエ、嘘ではありません。それに僕は伴侶はその婚約者1人と決めていますから！」
初めて聞いたよそんなノロケ話。
それを聞いた王様は、嬉しそうなでもちょっと困ったような顔をしていたが、
女性のほうが、
「おめでとうございます！！」
と言ったのにはみんなびっくりした。
なにせ、お見合い相手に会っていきなり婚約者が居てしかもそれにお祝いを言ったんだからビックリしない訳がない。

「うわ～　困った・・・」
そう言って、王様はうなだれてしまった。

困りごと（後書き）

新しく出てきたセリの兄（王様）ですが、色々な呼び方してます。
ちょっと読みづらいかも。
すいません（汗）
そのうち、また登場人物紹介改めて書かせてもらいます。

改めて登場人物紹介（前書き）

メモ程度デスが・・・。

改めて登場人物紹介

・田中夕美
主人公
転職をして現在第二隊副隊長に。
黒髪黒眼（典型的な日本人）で髪の長さは肩より少し下ぐらまでの長さ
背は、ぶっちゃけ低いです。

・風耶
風の精霊
夕美と契約している。

・田中一樹
主人公の兄
第一隊副隊長

・光耶
光の精霊
一樹と契約している。

・森ノ下麻耶
一樹の妹兼夕美の姉となり、セリと婚約中。
（こちらも典型的の日本人）髪の長さは夕美よりもう少し長くした感じ？

・メイ
同室になったのをきっかけに友達になった。

・シラト
メイの弟シスコン2号
一樹と話が合う。

・セリウッド＝バレン
イートラ国第二王子
麻耶と婚約中

・アン＝ラドリー
メイド長
ロイックさんの奥さん

・ロイック＝ラドリー
庭師
アンさんの旦那さん

・キリト＝ラドリー
第二隊隊長
アンさんロイックさん夫婦の息子
――
基本的に第二隊に夕美は妹みたいにネコかわいがりされている
（小さい子に見えるらしい）。
《第二隊》

・トトカ＝オルコット
町の左官屋の息子
ちょっとした城壁の修理とかはみんなトトカに任せている。

・ナサリオ＝ベレス
優男風な人

・ファビアン＝ピエール
第二隊唯一の貴族子息だが、あまり家の位が高くないため
以前居た第一隊では、ほとんど雑用だったが、
こちらに移って皆に仲良くしてもらい今では移動など
したくないと思っている。

・ラビ＝ロギノフ
魔法オタク

・ヨーン＝トールス
精霊オタク
契約はしてないが、精霊大好きというちょっと変わりもの
契約しているという田中兄弟も大好き♪

・ダミアーノ＝トールス
妹大好きというシスコンと言う
一樹やシラトと嫌な共通点があり
この国にはシスコンが多いのだろうか？

・ウジェーヌ＝ギマール
ダミアーノの妹にひそかに片思い中。

・バイアス＝アントノフ
メイを密かに気にかけている？

・テディー＝コック
見た目、性格お父さん

・コルネリウス＝バルト

・レイモン＝ペタン

・アードルフ＝ノダック
お酒大好きトリオ

・ニール＝マイヤー
普通の人（凡人）

以上第二隊でした。
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
《ハタラージ国》
・アンリッシュ＝ラージ
セリウッドの兄で元イートラ第一王子
現在はハタラージ国国王

・アナベラ＝ラージ
アンリっシュの奥様
元ハタラージ国の姫様
現在はハタラージ王妃

・ヨハンナ＝ハンマル
アナベラの友人
ハンマル家の１人娘

・ヴィクトル＝ハンマン
ヨハンナの父親
アンリッシュの側近

・ルルデス＝ハンマン
ヨハンナの母親

他にも、

・料理屋のおばちゃん
・調理担当のおじさん（ミトさん）

改めて登場人物紹介（後書き）

とりあえず、これくらいですかね？

お見合い相手？

女性の正体・・・それは、王様の元見合い相手兼アナベラ王妃の親友だった。
名をヨハンナ＝ハンマル
ハタラージ国王の側近の一人娘。
ハンマル家は祖父、父親と側近を2代で務めており又、
貴族の中でも上位な家柄だ。

そんな家柄の一人娘とのお見合いをけって現在の王妃つまりアナベラ王妃と結婚してしまったため
未だに独り身のヨハンナを以前から、夫婦で気にしてため
王様は弟の事を思い出した時、なんだかんだ理由をつけ訪問させたが
弟が婚約しているとは知らなかったらしい。
しかもお見合い相手ヨハンナに至っては、お祝いを述べる始末。
そのとき王子の後ろで待機している私は、無関係だったので
風耶と世間話をしていて、はたから見ればただぼーっと突っ立っていた風にしか見えないのだけれど、
一方、隣の隊長も我関せずという顔をしながら突っ立っていた。

相変わらず、頭を抱えた王様
それを見たルンルン笑顔のヨハンナ嬢
王妃は「そんなにセリ王子は魅力ありませんでしたか？」と、笑顔のヨハンナ嬢に聞いていた。
「いいえ、セリウッド王子はとても魅力的です。ですが私、はじめて一目惚れと言うのをしてしまいましたの。」
それを聞いた王様は笑顔になりで顔を上げた。
「まぁ！」
「それで、相手は誰なんだい？」

ヨハンナ嬢は、着ている赤のドレスに負けないぐらい真っ赤に頬を染め上目づかいで隊長をじっと見つめた。
「「「なるほど～」」」
関心する王族たちそして、
「セリその護衛の名は？」
「はい、第二隊隊長キリト＝ラドリーです。」
「キリト＝ラドリー　セリの代わりにヨハンナをもらってくれないか？」

「・・・・申し訳ありません。すでに私には恋人がいますので。」
隊長にはすでに恋人がいらっしゃいました。

お見合い相手？（後書き）

いつも読んでくださってありがとうございます。

仮の恋人（前書き）

ヨハンナ嬢のことを女性と書いて、訂正せずそのまま投稿してましたので
改めて訂正しました。

仮の恋人

隊長には恋人すでに恋人がいたのか～
そんなことを思っていた時、ぽん！となぜか左肩に手が・・・
この手の主をたどって見てみると隊長デシタ
そのまま隊長に引き寄せられ寄りかかってしまい？？
わけのわからないままでいると、

「改めて、恋人のユミです。」
なぜかヨハンナ様と王様に私を隊長の恋人として紹介し始めた。

ヨハンナ様は驚き私に鋭い視線を向け、王様はまたもや頭を抱えふさぎこんでしまった。
急に体が引っ張られ訳分からず、風耶と話しをしていた私は
アレッ何話していたっけ？とここにいる皆さんと違うことを考えていたが、
風耶にいきなり『ユミ、タイチョ―の恋人？』と聞かれ
『そんな訳ないじゃん。』
と否定した。
さっきまで普通に話していたのに、どうしたのかと思い
『急にどうかしたの？』と聞くと、
『だってタイチョ―、ユミの事恋人だって言ってた。』
『はぁ～！！』
私は驚き横にいる隊長を見上げ、小声で
「私いつ隊長の恋人になったんでしょうか？」
と聞くと、
「たった今から、この国にいる間恋人の振り少しだけヨロシク。
ちなみに隊長命令だから拒否権なしね～♪」
何でもいいけど面倒なことに巻き込まないでほしい。

「とりあえず、私に手を出さないでくれれば別にかまいませんよ。
あっ念のため兄に、
今日報告するときこの事も報告しておきますね★」
いざという時の少しでも保険をかけておこう。

ちなみに、この国には滞在期間は2週間ぐらい。
その間、私たちは王子に張り付き護衛をする。
もちろん、隊長とほとんど一緒。
ほかのみなさんと一緒の護衛は、王子が外に出るときぐらいが外に出るときぐらいで、恋人の振り
といってもただ真面目に仕事してればいいだけだと思うんだけど・・・。
そんなに嫌だったのかな?あんなに、赤いドレスも着こなせるほどセクシーで美人なのに。
きっと、隊長と並んだら絵になりそうだけどな〜・・・。

あいかわらず頭を抱えた王様はそのままで、
王子とともに王妃様に挨拶し部屋に戻ると隊長からやっと解放された。
部屋には、私と隊長そしてなぜか王子まで。
「さぁ、本音しゃべってもらおうか（笑）」

仮の恋人（後書き）

おはようございます。
いつも読んでいただいて、ありがとうございます。

七並べ（前書き）

いつも読んでいただいてありがとうございます。

七並べ

「さぁ、本音しゃべってもらおうか？」

「本音って何だ？」
「とぼけんなよ。コイツお前の女なんかじゃないだろ？」
「アレ？わかってらっしゃる？」
「当たり前だ！」
「あっ、でもコレから口説く予定だから♪どっちにしてもあの王様の紹介された女は
無理。という訳で、お前頑張れ！！」
「嫌だから。まだ口説く段階ならお前でいいじゃん。」
「好みじゃない。」
「・・・・俺も。」
「じゃぁ、いくら王様と言ってもお前の身内だし断ってくれ。ヨロシク♪」
「・・・・部屋に戻るわ。」
そう言って王子は隊長と一通り言い合った後、部屋へ逃げて行った？

王子が逃げ帰った後、
私は、お兄ちゃんに風耶と光耶ちゃんを通じて一日の報告をするため
部屋のベランダへ出た。
部屋は3階風通しもいいため、報告に持ってこいだ。
風耶に今日の報告内容を伝え、それを風耶の仲間に伝えてもらう。
そして、光耶ちゃんからお兄ちゃんに伝えてもらうのだけど、
日のあるうちにそれを行わなければならない。

それを、実行した後は今日はもうやることがなくなり自由時間だった。

隊長もその他の隊員も暇そうに遊びに来ていた。
私も、みんなとカードで暇つぶし。
テディの隣に座り七並べ
テディは、とても大柄なお兄さん。
わたしが隣に来るとよく親子とからかわれるが、本人はまんざらではない様子。
子供好きなのか？まぁ優しい性格ではあるけど・・・。

ただいま、ダイヤ９止められています。
明らかに、わざとです。
誰だよ！
あとちょっとなのに！！
ちなみに、１番最初に上がったのはラビでした。

そうやって、夢中でカード遊びをしていたところあっという間に時間がたち
夜に・・・。

夜になっても暇なのには変わらず、ベッドに入る直前までみんなこの部屋で暇つぶし。
まぁ、その頃はどこから持ってきたのか酒盛りが始まっていて・・・
この酒臭い部屋で寝るんデスね。

ちなみに、みなさんお酒には強いそうで寝る頃にはそれぞれの部屋に帰って行き
また隊長と二人っきり。
そういえば、これだけは聞いとかないと！
「たっ隊長？」
「何だ？」
「あの！昼間王子との会話・・・。」

「会話？」
「あの、・・・私を口説くって。」
「あぁ、あれは出まかせだ。」
「えっ、出まかせ？」
「ホントに口説いてほしかったか？」
なぜか、ニヤリとする隊長。
イエ、そんな怖そうな笑みいりませんからーーー（汗）

私は、「イエ、遠慮しときます・・・。」
そう言って回れ右をし、部屋へ戻りました。

暇つぶし

あの日から、
朝起きると部屋へヨハンナ様が朝の挨拶と言ってやってきて
仕事中は、
基本私たちは、王子の警護なので
王子の周りをうろちょろし、少しでも仲良くなろうと会話を何でも
かんでも隊長に振ってくる。
しかし、それが裏目に出ていると気づいていないヨハンナ様。
興味のない会話をされ、苛立っている隊長に早く気付いてほしい。

最近では
王子までも隊長に同情の眼差しを向け、
夜、王子が部屋に来ると
「日程を早めに切り上げて帰るか。」
と言い始めた。
普通なら、止めるんだろうが隊長も両手を上げて大賛成
そして、機嫌の悪い時八つ当たりされている隊員たちも賛成で誰一
人止めるものが居なかった。
私？賛成デスよ？
だって、早く帰って光耶ちゃんの手料理食べたいし♪
いつまでも、イライラ魔の隊長と相部屋なんていや！

次の日、早速王様に王子が日程を早めることを告げるとヨハンナ様
が明日町を案内する
と言いだした。
もちろん、王様は大賛成。
王子も城でお偉いさんたちと面会ばかりだったので、これには賛成
だった。

そして町へ行く当日、あまり大勢で行っても町の人たちをびっくりさせるだけなので
見た目お父さんなテディと優男のナサリオそして凡人の二ールが私たちと同行することになった。
ヨハンナ様を待っている間、テディとナサリオの間に挟まりみんなで話しをしていると
隊長が、
「お前いつからテディとナサリオの子になった？」
と茶化して来た。
これは、いつもの事
「いつからだっけ？パパ？」
そう言って、テディに顔を向ける。
「あれ？いつだっけなぁ？かぁさん」
「さぁ、いつ生んだかしら？」
ナサリオ、母さん役がハマってます。
暇なときだいたいこんな調子で遊んでます！
そして、最後隊長が
「親なら産んだ事ぐらい覚えとけ！」
と突込みを入れ
「「じゃ、うちの子引き取ってください（な）♪」」
と、アホな会話で時間つぶしをしてます。
そうしているうちに、ヨハンナ様がいらっしゃったようです。

ヨハンナ様は、いつも自分が話しかけてもあまり話さないのにさっきは、隊長がおかしそうに話していたことがあまり面白くないみたいです。
しかも、私に対しては睨みを向けているし・・・。
同じ女性だからか？

いや、私女として見てもらって無いから安心してもらってもいいんだけどな～・・・。
ただ、職業柄仕方なしに一緒にいるってだけで。
まぁ、コレ伝えてもいいんだけどさ？
命令で、恋人の振りしてるわけでしょ？
伝えたら、意味ないし・・・。
ヨハンナ様ごめんね？

お土産

町は、人で賑わっていて、町に作りもイートラ国と少しだけど違い
こっちの町のほうが整っている感じがする。
そんな印象を受けながら町を巡っていた。

最初は案内を買って出たヨハンナさま。
案内は聞けば一応してくれるけど、後は隊長とおしゃべりしながらで
独り周りを気にせず、デート気分を満喫している様子。
肝心の隊長は一応ヨハンナ様のご機嫌を損ねて無い様に、
王子の警備をしながらヨハンナ様の相手をしていた。

一方私やテディ、ナサリオ、ニールは、買い物はできないけど商品
を眺め
それなりに楽しみながら、王子の警護に当たっていた。

隊長を見て見ぬふりの態度じゃ恋人失格じゃないか？
ってテディに聞かれたんですが、
ただいま勤務中！公私混合はやめましょう♪
っていったら、都合いいな（笑）って笑われた。
都合良くても何でもいい！
勝手に恋人にしたのは、隊長ですから！しかも命令。

順調に、町の視察も進んであと少しと言うとこで、王子にお願い。
「あの、お土産買いたいんで少しだけ自由行動いいですか？」
この言葉には、みなさん少し呆れてました。

「あれ、いけない事いった？」

「いや、少しだけだぞ。」
王子からお許しをもらい、テディと一緒に買い物へいった。
ちなみに護衛が護衛対象から外れるわけにはいかないと、
ナサリオと二ールは王子の元に残っていた。
行くときに、テディが迷子になるといけないからと手をつないでくれた。

後から聞いた話だと、
それ（テディと私の手をつないだ後ろ姿）
を見た王子と隊長が大笑いしたそうだ。

・・・さきほど、目星つけておいた店につくと、
さっそくお土産選び開始！
お兄ちゃんに光耶ちゃん、メイに先輩かな？
指折り数え、お菓子の箱をひと箱と色違いのきれいな石のついたペンは、私と王子風耶の分も買った。
本当は、個々にもっと色々と思ったけど、
そんなに時間と金の余裕がないので
コレぐらいで・・・
テディも、頼まれたナサリオや二ールの分も買い終わり
みんなの所へ戻ることにした。

お土産（後書き）

いつも読んでいただいてありがとうございます。
王子と隊長が大笑いした真相（わけ）。
イメージ的に大男（独身）が、ロリコン（笑）
に見えたから。

隊長～

集合場所に戻ると、誰もいなかった。
私たちは、買い物に夢中で遅れちゃったのか？
テディと顔を見合わせどうしたものかと考えたがとりあえず待てるまで
待ってみることにした。
その間に、前みたいに風耶には王子たちを探してもらうようにたのみ
待っている間時間が経ち、暗くなり始め周りの店や家には、明かりがつき始めた。

元々大通りではなく、ちょっと中に入った小道で待っていた為
酔っ払いなどには絡まれずに済んでいるが、あまり人通りの少ないところに
女の子が居るのは良くない！というテディの説得で、一端城に戻ることにした。

もしかしたら先に城に帰ってるかも知れないし。

風耶を呼んで3人で城に向かおうと、歩いているとやっぱりいらっしゃいました。
町のごろつきが・・・
テディが守ってくれて私も風耶も出番はありませんでした。
ごろつきは、5～6人居たんだけど、威嚇しただけで3人ほど逃げ残りの3人は腰を抜かしたようです。
「テディすごいね！それとありがとう♪」って言ったら照れてた。

途中、町から少し離れた道を通りどうにか城に戻るとやっと王子と合流。

「ただ今かえりました～」
「おそい！」
「いや、遅いって王子や隊長らいないから待っていたんじゃないですか～。」
「はっ？ヨハンナ嬢が使いからお前らは、後から帰るから先に帰れと伝言を頼まれた。と
聞いたぞ。」
やっぱ馬鹿王子・・・
「ヨハンナ様の使いって誰か知らないのに伝言頼めるわけ無いじゃない。」
「あっそうか！」
「「馬鹿王子」」
「・・・・・。」
「それで、隊長は？」
「あぁ、ヨハンナ嬢に呼ばれて部屋へ・・・・。」
「のこのこ行ったんですね！」
「あぁ・・・・。」
「明日は、婚約ぱーてぃですね。」
「助けないのか？」
「なんで？」
「（仮）恋人だろ」
「（仮）デスが」
「助けてやれ。」
「・・・条件次第では。」
「何だ。」
「メイと同じ日に一日休みをください。」
「解った。」
という事で、ヨハンナ様の部屋へレッツゴー！ってあれ？
「王子、ヨハンナ様のお部屋わからないので連れてってください（笑）」

隊長～（後書き）

おはようございます。
いつも読んでくださりありがとうございます。
いつの間にやら、お気に入り登録５０件になっててビックリです☆
これからもよろしくお願いします。

ヨハンナ様の部屋にて

連れられて、ヨハンナ様のお部屋へ行くと
部屋の前には見張りの方々が居らっしゃいましたが王子権限活用すると
通してくれました。
馬鹿王子は、身分だけは便利ナンデスネ♪
そして、部屋へ突入するとアラ不思議？
隊長がヨハンナ様をベッドへ押し倒しているではありませんか。
「おい！早すぎるぞ！！せめて婚約までは待て」
ソッチ！？それじゃ、私も
「隊長！私ってあて馬だったのね（笑）お兄ちゃんに報告してやります★」
「隊長！頑張れ！！」
「「「では！！（笑）」」」
そういって、3人で出て行こうとすると、「待て」とお声が・・・
そして、目で助けろ！と私にだけ語っています。
ちっ、逃げれると思ったのに。
めんどい・・・
隊長、この借り後で帰してきっちり帰してネv
そう思いながら、
隊長のそばまで行き、がばッ・・・
「お兄ちゃんに報告して、私を捨てた隊長に報復してもらおうと思ったけど、
ヨハンナ様、やっぱりあきらめきれないんです！
返していただきますね！私の彼を。」
背からぎゅっと抱きしめていると、隊長も顔だけこちらのほうだけ向いて

隊長は、ヨハンナ様を離そうと・・・
離そうとするが・・・・離せない？
よーっく見てみると、ヨハンナ様の左手が隊長の脇の服をつかんでる！？
「隊長、ヨハンナ様に迫ったんじゃないの？」
「馬鹿か！おまえが居るのにどうしてそんなことする。」
・・・。
ヨハンナ様が今の言葉を聞いて絶句し、左手の力が抜けたところで隊長が起き上った。

あっ今の言葉は芝居ですよね。
ちょっと、はずかしいんであまりそういう言葉言ってほしくないな～なんて
思いながら、
「って事は隊長どうして、ヨハンナ様押し倒したんですか？」
「不可抗力だ！」
「？」
「服をつかまれそのまま引っ張られ逆に迫られた。」
「「「あほか（ですか）・・・」」」
「仕方なかったんだよ！」
「とりあえず、疑い晴れてよかったですね。」
「そうだな。」
そう言って、隊長は私のおでこにキスをし
私の肩に手をまわしながら自分たちの部屋へ引き返そうと、ヨハンナ様の部屋を出た。
私は、ちらっと部屋を出るときにヨハンナ様を見ると、顔を真っ赤にさせながら
睨まれているのをみた。

ヨハンナ様の部屋にて（後書き）

おはようございます。
いつも読んでいただいてありがとうございます。

今回は、ユミの性格って結構激しかったんですね（笑）そして
王子は、テディにも馬鹿王子と言われてましたね。
王子最初の登場よりかなり評価が下がった気がするのは気のせいで
しょうか？？

短いです！

部屋へ着くといつもの隊長に戻ってた。
やっぱり、ベタベタする隊長なんてキモイよね（笑）

その次の日も、ヨハンナ様はくじけず隊長にアプローチ続けていたけど
隊長は話しかけられたら相槌を打つぐらいで、あとは知らんぷりを決め込んだ。

そんなこんなで、
あっという間に帰る日になってしまい、一体この訪問何だったのか？？と疑問を残しながらも
帰国した。

帰ってみると、出迎えてくれたお兄ちゃんと光耶ちゃんと先輩。
なぜか家に帰ったはずなのに、王子がくっついてきているし・・・
王子と先輩はそのまま2人先輩の部屋へ行ってしまい
私たちは、リビングへ向かい
みんなに早速お土産を渡し、ハタラージ国での事を話した。

・・・翌日からまた、勉強&見張りの仕事だけど、入れ替わりに今度はお兄ちゃんが出張に出かけ
勉強を見てくれるのは当分の間、風耶だった。

メイの転職

このごろ、戻ってから風耶といて楽しいんだけど
やっぱり第二隊のオニーサンたちとも遊びたい！と思いはじめ
近頃では朝少し早めに出て、演習場に行き挨拶やおしゃべりを楽しんで、仕事や勉強が終わると
執務室に直行と言う日々が続いています。
そして、話し始めると楽しくなり夜遅くなる⇒気が付き急いで帰ろうとする⇒なぜか隊長に
引き留められ家まで送られる⇒めんどくさいので泊まっていく隊長⇒一緒に出勤・・・
という日々です。

あ、もうひとつメイが第二隊の執務室のメイドになりました。
何でも、私と仲がいいから☆と王子に脅し移動させたそうです。
もっとも、いつまでもメイの相棒を見つけない王子の駄目な仕事っぷりにちょっと切れたの
かもしれないけど・・・
でも、執務室に行くたびにメイに会えるのは嬉しくて、お兄ちゃんにも感謝しなきゃ！

今日もいつもの丘でいつものように本を広げ風耶に勉強を教えてもらっています。
もちろん見張りも兼ねて・・・
夕方、いつものように異常がなくつつがなく仕事が終わり執務室によると、いつものように
メイがテディと話しをしていた。
「ただいま～」
「「お帰り（なさい）～」」

見てみるといつも寝ている隊長が居なかった。
「アレ、今日隊長ねてないの？」
「・・・例の王子に呼ばれてった。」
「あの馬鹿王子？」
「そう。」
「だっだめですよ！自国の王子様に向かって馬鹿王子なんて！！」
そう説教始めるメイだったけど、私とテディは改めるつもりはない。
「あぁ、別にかまわないんだよ。馬鹿だし。」
「そうそう、馬鹿だから・・・。ねぇ、風耶？」
そう、問いかけると久しぶりに私以外に姿を見せた風耶。
「あれ、馬鹿だものね～」
風耶にまで（笑）
「その馬鹿が来たんだか・・・」
「・・・」
噂をすればなんとやらって本当だったんだ。
「ヨッ！馬鹿王子♪」
「こんちわ～」
「お前ら～！！」
「あの！私をこちらに移してくださったのは王子様なんですよね。
ありがとうございました。
おかげで、また気軽にユミと話せるようになりました。」
「あぁ、その申し出を言いだしたのはカズキだ。
礼はカズキに言え。」
「はい！」
ちらっと、王子は風耶を見たけどまた目をそらした。

「ところで、王子今日は何の用事？」
「あぁ、キリトは後から来るがお前に一言・・・頑張れ！とスマンと・・・言っておきたくて。」
なんか悪い予感。

「とにかく、もうすぐメイの新しい仕事仲間を連れてくるから皆仲良く頼む。」
そういって、去っていった。

メイの転職（後書き）

いつも読んでいただいてありがとうございます。

ユミの来る前の隊長

私が仕事を終えるちょっと前の事。

執務室に入って隊長を呼びにトトカが呼びに来た。
「隊長～。王子に呼ばれてます。」
「・・・・・・。」
「寝てるぞ？隊長。」

今言ったのは、ナサリオ。
とりあえず、例の言葉で起こしてみるか！と、
隊長を呼びに来たトトカが起こすことになった。

隊長の耳元で「アンさんがいらっしゃってます・・・。」
この一言の絶大な事。

目をぱっちり開け、周りをキョロキョロ、何処にいるんだよ！半分
座った目で
睨みを利かしてくる・・・
起きた今がチャンス！！とばかりにトトカは「王子がお呼びです」
と一言。
すると、「判った。」と言って立ち上がり執務室を出て言った。
トトカの役目はここまで。

廊下に出て王子の居る部屋に向かった隊長は、一体何で呼ばれたの
か判らなかった。
一応、普段寝ていてもちゃんと仕事はこなしているし、これと言っ
て問題もない。

親も特に問題を起こしていないはず・・・
問題・・・あれはもう帰って来たから関係ないはず・・・
もしや、お袋が変なこと王子に頼んだ訳じゃないよな？
まさかな？
そんなことを色々考えながら歩いているとあっという間に着いた王子の居る部屋。
分厚いドアをコンコンとノックすると中から「入れ」と声がかかった。

「失礼します。」
そう言って、ドアを開け中に入りドアを閉めると
いつもの態度に戻る。
「で、俺の睡眠の邪魔した理由ってなんだよ。」
「はぁ～やはり寝てたか・・・」
「悪いか」
「別に、お前の隊の場合仕事はキッチリしてるから文句は無い」
「じゃぁ、邪魔するな」
「いや、そうもいってられなくなってな」
そう言って話していると、王子がメイドにお茶を催促し
「立ち話もなんだから、まぁ座れ」
2人は、座りお茶を一口飲み一息入れると、
「この間のヨハンナ嬢は覚えているか？」と王子は問い、
又2人は話し始めた。
「あぁ、あのしつこいお譲さんだろ？」
「そうだ。」
「それが、どうかしたのか？」
「来た。」
「どこに？」
「この国」
「マジ？」

「あぁ。」
「・・・・・」
「追いかけて来たらしいぞ、お前を。熱烈だな（笑）」
「勘弁してくれ！」そう言って隊長は、両手で頭を抱えた。
「あっでも、直ぐに帰るんだよな？なっ？」
「それが、ちょっと厄介でな・・・」
「兄経由で、お前の身近なとこでメイドとして雇ってほしいと。」
「思いっきり、権力使いまくりじゃねーか！」
「「はぁ～。」」
「まぁ、今回は自国だしメイドとして扱ってやってくれ。」
「客じゃなくて、メイドでいいんだな？」
「あぁメイドで、頼む。」
「判った。」
話が終わると、
王子が先に言って一番被害が出るであろう夕美に謝ってくるといって
部屋を出て言った。
ヨハンナ様は、後から来るから執務室へ案内しなければならない。
2人っきりってだけでも憂鬱だった。
しばらくは、夕美に（仮）恋人を続けてもらうか・・・
と思いながら部屋で待機していた。

ユミの来る前の隊長（後書き）

おはようございます。
いつも読んでいただいてありがとうございます。

ユミの来る前の隊長2

部屋で待機していたところ、早速やってきたヨハンナ様。
俺を見つけると同時に首に巻きついてくる・・・ヨハンナ様には磁石でも仕込まれているんだろうか？
そう疑問に思いながら執務室へ案内する。
案内途中、ヨハンナ様のおしゃべりが半端なかったのは言うまでも無かった。

執務室に着き早速みんなに紹介。
紹介と言っても、一度はあっているから知っていると思うが・・・
そして、メイに仕事の面倒を頼んだ。

「ヨハンナ様、いえヨハンナさん、これからココにいる間は、俺たちはメイドとして扱うので
そのおつもりで。」
と、メイドとして来たならちゃんと仕事してね♪
と釘をさしておいた。

そして、もうすぐ秋・・・
収穫祭の季節。
「会議始めっぞ！」
その一言で、みんな執務室に隣接する会議室に移動した。
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
みんな所定の位置に・・・って所定の位置なんかないのでテキトーに着き、

座る。
その間に、私がみんなの分のお茶を入れ配り、配り終えると
席に着いた。
いつもなぜか空いている席が隊長のとなりなので自然に隊長のとなりになってしまう。

隊長は、「会議を始める前に一言。あのお嬢さんが来た時点で判ったと思うが、もうしばらく
こいつには俺の（仮）恋人役をやってもらう。という訳だからあんまり余計な事言いふらさないでくれよ。」と、隊長が言うと、

「じゃ（仮）なんですから前みたいに、あまり過剰なスキンシップ控えてくださいね」
とちょっと近頃お兄ちゃんに似てきたテディが言い返した。
お兄ちゃんと似てきた事を判っているのか、「判った」といって隊長は
本題に入った。

ユミの来る前の隊長２（後書き）

いつも読んでいただいてありがとうございます。
今回から、季節感取り入れてみました（笑）

お祭り（前書き）

お祭りに関して、訂正させていただきました。

お祭り

～収穫祭について～
・2日続けて行われるらしい

・2日目には貴族の方々や一般の方々にくじを配り、当たった方には、
身分関係なく出席できるダンスパーティが行われるらしい。
と、隊長に説明された。（一応、この国に来て初めてのお祭りなもので・・・。）

何でも、当日はいざ何かが会った時すばやく動けるようにテキトーに見周りを
していればいいそう。
というのは口実で、祭りで見周りを兼ねながら遊んでいるそうだ。
これは、どこの隊でも一緒なので暗黙の了解みたいなもの。

そして、2日目は、朝からあちこちで騒いで呑んでいるらしいので
それにも対応しなければいけないらしい。

ちなみにうちの隊では、酒好きトリオが居てその人たちは必ずと言っていいほど
毎年朝から呑んでいたりするらしい（笑）

お祭り（後書き）

いつも読んでいただいてありがとうございます。

子供扱い

配置も決まり、その他諸々連絡等も伝えたところで会議が終った。
カップを再び回収し、洗い終ると隊長が待っていました。
「あれ？隊長まだいたんですか？」
そう聞くと、
「カズヤの留守は、頼まれているからな。」と言われ
結局、今日も一緒に帰ることに・・・
詳しく聞くと、「女の子だけだと不安だろうから頼まれた。」だそうだ。

風耶もいるし、別にだいしょうぶだけどな～
まぁ、心配性のお兄ちゃんが安心するならいっか！

そう思いながら、隊長と一緒に今日も帰り、光耶ちゃんもいないため、
途中買い物をして、家に着いた。
私は、ここに来る前は両親と離れて暮らしていて自炊していたため
料理と家事は
意外と出来る方だと思う。・・・たぶん

昨日は、みんなと食事（みんなは飲んでいたが）してきたため
朝、キッチンを覗いたときほとんど食材が無いので驚いた。
これは、買い物に行かないと！
そして、今日も家に隊長が泊まると判ると
一緒に買い物に連れて行き、食材費は全部隊長に出してもらった♪

（仮）恋人するんだからこのぐらいいいよね？

家に着くと、着替えて早速料理開始！
メイのおかげで、この国の食材が判るようになり、
和食も少しぐらいなら作れそう。
でも、今日はハンバーグとサラダだけど（笑）

料理が出来て、隊長を呼び
お互い着席すると、「あともう一人の女性はいいのか？」
と聞いてきた。
あっ、先輩は女性扱いなのね？
「先輩は、王子とデートらしくもう出かけましたよ？」
「そうか。」
「子供と食事なんかつまらないんでしたら、風耶やヨハンナさんでもよびましょうか？」
「いやさすがにそれはやめてくれ・・・」
私は、それを聞くとめのまえにあったぱんにサラダとハンバーグをはさみハンバーガー？
サンドイッチ？状にして
「ちょっと、やること思い出したんで別の場所で食べますね。」
といって、屋上に向かった。

ちなみにお兄ちゃんの屋敷は、洋風な作りで3階だての
屋上つきというちょっと変わっていた。
屋上と言ってもこじんまりとしたスペースだけど、私にとっては、
落ち着くスペースだった。
私は、読みかけの本を片手に、ハンバーグもどきをもう片方に持ち
椅子に腰かけた。
夜と言っても、ちょっと肌寒いぐらいで心地よい風が時々吹いて
空には、星が・・・・出ているはずなんだけどな～～～～

明日雨かな??月は出てましたョ。

私の座っているイスはいわゆるガーデニングチェアー
その隣にガーデニングテーブルも置いてあり、明かりも準備万端！
なので、夜でも本が読めるわけです。

本に夢中になっているとふと、後ろに気配。
☆丁度いいので実験台になってもらいましょう☆
「～～～～～～～えいっ」と手のひらを思い切り振りおろすと気配の真上からざばーっと
水が落ちる音が・・・
成功の様です。
ちなみに、実験台の餌食は誰だったんだろう？
そーっと警戒しながら近づくと、アレ？
「なんでずぶぬれ？」
「オマエガヤッタンダロウ？」
「なぜ、そのような所にいるんですか？」
「おまえ、急に態度がおかしかったから・・・」
「心配無かったか？」
「ソノヨウデス」

「で、機嫌治ったか？」
「はい。」
「そうか・・・」

「・・・」
「・・・」

「じゃ、もう寝ろ。子供は寝る時間だ。」
「（怒）わかりました。寝ます！！」

そう言って、ドカドカと音を立てながら部屋へ向かいベッドへもぐった。

ちなみに、先輩は結局その日帰ってこなく翌日帰って来た。

そして私は、その日からお祭りまで隊長と口を聞かなかった。

子供扱い（後書き）

いつも読んでいただいてありがとうございます。

収穫祭1日目

・・・・あれから、口を利かずに収穫祭当日（初日）になりました。

今日は、風耶と別行動。
風耶は、いつも通り丘で見張り仕事。
いつもの仕事をお休みするか？2人で話していると、風耶が離れていても話せるのを教えてくれ
夕方には、練習したのでもう安心！
という訳で、私は一人でお祭りに・・・（1人っていうのがチョット寂しいケド）
朝、最初みんなが執務室に集まるというので私も少し早めに執務室に向かいました。
すると中から聞こえたのは、ヨハンナさんと隊長の声。
「キリトさんって今日、お祭り警護しながら遊べるんでしょ？一緒に回りましょ？」
そういって、デートに誘っている様子・・・
あ～～～
あんま関わりたくないなー
そうだ！
とりあえず、誰か来るまで待っていよう！
そう思ったのもつかの間、トトカ来るの早いよ（泣）
仕方ない、そう思い
目の前に来たトトカに「おはようございます！」と声をかけた。
そして、中の説明をすると？
入りたくね～と、私と同じ反応が返ってきました。
けれど、これで逃げたら待っていた意味がありません。
トトカを壁にして・・・さぁ！入ろうではありませんか！！

「おい！そんなに押すなって！」
「まぁまぁ、おっはよ―ございまーす。」
部屋に入ってみると・・・隊長が・・・・ふ～～～～ん
「ココ執務室なんでヤるんだったら個人の部屋でお願いします。」
そう、また襲われていた。（注意したのはトトカ）
懲りないな～ヨハンナ様も
そして、隊長・・・強いはずでしょ？なんで押し切られるかな？
図としては、隊長が普段使っているちょっと立派な机の上に隊長が
倒れていてその隊長の上に
ヨハンナ様が乗っているって感じ・・・

「あの、ココ一応仕事場なんですよ。公私混合させないでください
ませんか？」
私がそんなこと言うと、
「解っている！！」
と、隊長逆切れ。
ヨハンナ様は
「あんたには、関係無いでしょ！！」
と怒鳴られるし・・・
目でトトカに助けを求めると、そらされた？！
はぁ～～もういいや

「隊長、とりあえず今日はお祭り回りながら警護してればいいんで
すね。
あと、風耶はいつもどうり丘のほうで待機してます。
では、失礼します。」
確認をして、執務室を出た。

収穫祭1日目（後書き）

遅くなりました。
いつも読んでいただいてありがとうございます。

収穫祭1日目2（前書き）

収穫祭1日目のほう・・・自分でも読んでいてかなり読み苦しかったので
少し直しました。
お暇な方もしくは、読んでやろう♪という方もしよろしければ、よんでやってください少しはましになっているはず・・・（汗）です。

収穫祭1日目2

執務室を出た後、風耶のいる丘に向かった。
警備だけど、私だけ遊ぶ感じがするし、お土産でも買ってこよう。
そう決めて・・・

風耶のもとに行くと光耶ちゃんもいた。
アレ？「おはよう！光耶ちゃん。光耶ちゃんが居るってことはお兄ちゃん帰っているの？」
「もう帰ってますよ？だけどお祭りまでに終わらせなきゃいけない仕事がたくさん残ってるから
直接執務室のほうへ行きましたけど・・・。」
「そっか～大変そうだね～」
「こっちの隊の隊長は人使い荒いですから♪」
「で、光耶ちゃんは今日はどうするの？」
「私もココで見張りです。」
「そう、じゃ、風耶も光耶ちゃんもヨロシクね。お土産買ってくるから♪」
「はい。」
「まかせとけって！」
そう言って、祭りが開催される町のほうへ歩いていった。
町へ着くころには、祭りが始まっているだろうな・・・。

歩いていると、時々すれ違う馬・・・
そして、通る馬車。
私はひかれないようにただいま端っこを歩いています。
ちょっと大きめの馬車が後ろから通り過ぎ・・・・ると思ったらア

レ？止まった？
「オイ、何ちんたら歩いているんだ？」
あっ、この声隊長だ
上を見上げるとやっぱ正解！
「あれ？町まで普通歩きで行くんじゃないんですか？」
『・・・・。』
「乗れ！」
「なんで？」
「いいから早くしろ！！」
そうして、馬車に乗せられ町に連れてかれた。
ちなみにその馬車第２隊の馬車でちょっとした移動時にみんなで良くそれに乗るらしい。

町に着くと、いつもは活気はあるものの古ぼけた町がそれなりにカラフルに彩られ
いろんな店の横や前に小さな出店らしきものが並んで、
いつもより賑わっていた。

みんなは、もう自分たちの配置に行ったようで、
私も、「じゃ！隊長お祭り楽しんでくださいね～」
と離れようとすると、腕を掴まれた。
！？
「あの～離してくれませんか？」
そう聞くと、
「どこへ行く・・・。」
「へ？お祭りに。」
「お前は俺と一緒だ。」
「でも、ヨハンナ様良いんですか？」
「はぁ～アレが居るから一緒なんだ・・・。」
「あの、私女よけじゃないんでいい加減かんべんしてください。」

「悪い。でも今回は、王子と婚約者さんの護衛も兼ねているから一緒に行動してもらわないと困るんだ。」
そういう事ですか・・・
「そういう事は早く言ってください。」
「さぁ！行きましょう♪って肝心の先輩と馬鹿王子は？」
「前にいる」
「前？」
よくよ～く見てみると祭りの門の前にカップルがひと組
あっアレですか
「どうやって護衛するんですか？」
「一緒に行動する、いくぞ。」
そう言って、手を引っ張られた。
そういえば、まだ手離してもらって無い～（泣）

収穫祭1日目2（後書き）

読んでいただいてありがとうございます。

只今、護衛中デス（前書き）

長い間、放置して申し訳ないです。
季節感出したのに、春になっちゃって・・・（笑）
ってことで、お祭り中の護衛から行ってみましょうか！

只今、護衛中デス

※今日の私の服装、只今お祭り仕様
（いつもの特注騎士服ではなく華やかなレースが所々
あしらわれてる刺繍入り水色のワンピースっぽいの）
になっております。※

先ゆく先輩は、赤いワンピースだった。
私たちは、少し離れながら2人を警護していた。
（と言っても私は風耶なしなのでほとんど戦力外だったケドね）

2人はあっちこっちへ色々な店を見ながら楽しんでいる様だった。
私も、警護をしながら色々と見れてたのしくニコニコしていると、
隊長と目が合い
隊長はなぜか、私の頭をポンポンと軽くたたいた。

その時、なぜか隊長はすごく優しい目をしていて思わずボンッ！と
効果音がつきそうなくらい
はっきりと顔が赤くなってしまった。

隊長、その目反則ですよ～・・・。

うっと思って顔をそらしたがたぶん見られた（汗）

すると、案の定「どうした？顔が赤いが平気か？」と聞いてきたが
隊長のせいデスよ！とは突っ込めませんでした。

そうこうしているうちに、噴水のある広場に到着！
広場では、道化師（ピエロ）や楽団（町の人たち）によるものでずいぶんと賑やかになっていた。

ここで、私たちの護衛は終了。
第三隊に引き継いだ。

「さて、これからどうする？もしよかったら一緒に回るか？」
「しょーがないですね♪」
特に一緒に回る人もいなかったので誘いに乗りその後楽しく隊長とお祭りを食べ周り（もちろん隊長のおごりでした♪）
１日目終了。

只今、護衛中デス（後書き）

短いですがやっと書けました。

2日目（前書き）

おはようございます。
メモ程度ですが登場人物紹介をちょこっとだけ直しておきました（笑）

2日目

町は今日も露店とか出ていたり、大勢の人が居たりで賑わっていますよ。

☆今日は、当たれば身分関係なくダンスパーティ☆

ちなみに私と団長は、王子と先輩が主催者側で強制出席と言う事で、チケットおしつけられました。
どっちでも良かったんだけどね～♪

そして、只今巡回中という名目で2人で町へ見物に来ているんですが、
前に2人の子供がチケットはすれたらしく大声で泣いて居たので丁度いいや★と言う事で譲ってあげました。

すると、「おねーちゃん、おじちゃんありがとう♪」ってすごく喜んでくれた。

私たちは、その笑顔を見て、
「いいことした後って気持ち良いですね～♪」
「まったくだ。」
そして、巡回を続けましたとさ・・・おわりっておわりじゃないよ～？

・
・

・　・
午後になりダンスパーティの開始時間頃・・・
私たちは、お昼を買いにとある屋台に寄っていました。
その屋台は、以前シラト君やメイに案内してもらった料理屋さんの屋台。
何でも、メイもシラト君も今日はそこでお手伝いをしているらしいので
覗きにきたついでだった。

「こんにちわー」
屋台に顔を出すと、やっぱりメイが接客していた。
「あら、いらっしゃい♪デート？いいわね～」
「いや、仕事だから・・・。」
否定すると、なぜか隊長から足を踏まれた。
思わず「いたっ！」っと
声を出すと、平気か？なんてわざとらしく声をかけてくるし
訳わかんない。

その後、お店のおばさんにも挨拶し、お昼を買って
広場に移動。

出店にて（前書き）

いつも読んでいただきありがとうございます。

出店にて

広場に移動しながら、おひるを食べ
食べ終わると、出店をうろうろ・・・

出店は、雑貨屋さんや洋服屋さん，食べ物を売っている屋台などがあり
その中でもチョット変わった感じのお店を覗いてみると
色々な石のアクセサリーが売っていた。

「かわいいー」
その中でも、水色の花のついたピアスと緑の花の指輪がセットになって
いるのが気になった。

わたしが、それを見ていると横から隊長がそれを店の人に差しだし
「これをくれ」といって買ってしまった。
私が財布と相談して買おうと思ったのに〜〜（泣）
がっかりしていると、「ほら」
といってさっき買ったピアスと指輪をくれた。
「隊長・・・熱無いですか？」
「あるわけないだろ。」
「今日、変ですよ。」
「そうか・・・。」
「そうです。」
「で、いるのか？」
「はい、いります！ありがとうございます。」思いっきり笑顔でお礼を言うと、
なぜか、顔をそむけられた。

隊長の頭の中。（前書き）

こんにちは、いつもありがとうございます。
今回も、相変わらずグダグダ調子です。
亀の様に進んでいますが、気長にお読みください（＾＾；

隊長の頭の中。

広場には、たくさんの人が集まっていた。
その中には、いつもの顔ぶれが・・・

第二隊のほとんどが王子からチケットを貰っていたらしいけど
広場で騒いでたほうがいいと言って、知り合いや子供たちに譲った
そうだ（笑）

★今頃、第二のみんなが居なくて悔しがってるかな～★

夕方に近づいてくると、みんな子供たちが家に帰って行った。
そんな中、「お譲ちゃんも早く帰らないと化け物にたべられちゃう
ぞ～（笑）ハハハ・・」
と、知らない酔っ払いのおじさんに言われた。
この言われた言葉、早くお家に帰らない子供や言う事を聞かない子
供に言う言葉だと以前聞
いたことがあった。
（以前にも子供と間違われ、言われた事がある・・・ハァ）

ハハッ・・・また、間違われたよ～（泣）
隣にいた隊長に、「化け物に食べられちゃうの？」と見上げ（身長
差がある為）聞いてみると、
「おまえの場合は、別なものに食われるかもナ」と、訳のわからな
い発言を
してくれました。
やっぱり、今日の隊長ちょっとおかしい・・・。
反対側の隣にいたテディに、「隊長の頭のねじが外れた！！」
涙目に訴えると「いつもの事だ」と言うお言葉が・・・。

そうか、いつも頭のねじが外れるのか。
今度、お兄ちゃんに直してもらおう！
と変な考えをしていると、顔に出ていたのかお隣から拳骨が飛んできました（泣）

そんな馬鹿話をしているうちに夜がやってきましたョ～。

広場の夜（前書き）

はい、おはようございます。
今日から、ランキングバナー設置しました☆
以前から見かけていて気にはなっていたんですョ・・・。
（そんなんで設置するなって（笑））
所で、今日は広場での夜編。ただ単にどんちゃん騒ぎ？
まぁ、読めば判りますよね♪

広場の夜

広場では、朝から呑んでいた男の人たちに加わり、家の仕事を終えた女性なんかや旅人なんかも加わり
みんなあちこちで呑みや歌えやで楽しんでいた。

コルネ（コルネリウス＝バルト）やレイモン（レイモン＝ペタン）
ルフ（アードルフ＝ノダック）は第二隊のなかでは、お酒大好きトリオとして定着していたが
毎年この祭りで朝から呑んで居るという事では、町でも有名で人気者だという。（祭りの日だけ）

そして、今年も朝から誘われ呑んでいるようだった（ちらっとすれ違いざましゃべった時に
お酒の匂いがしてた。）
ちなみに、この国の成人は１６歳もう私もお酒ＯＫ　だけど呑んだ事がないためちょっと不安だった。

そんな事を考えていると、ついさっき子供と間違えてたおじさんから、「こっちへおいで」
と、誘われ（あれ？やっぱ子供扱い（笑））
おじさんたちの座っているテーブルへ。
隊長は、後ろからついてきたけど、テディはいつの間にか別のところへいってしまった。

席に着くと、早速隣のおじさんから「これで、１６歳だなんて、子供にしか見えないな～。
うちの娘より年上なのに全然みえないな、ははは（笑）」
おじさんは、私の頭をなでながら笑っていると、同じテーブルにい

たおじさん笑っていて
しまいには、隊長までもが、大笑い。。。
ちょっと頭にきた私は隊長の腕をテーブルの下からつねると
「いッ！」っと一瞬顔をゆがめたが、反対側にいたおじさんにお酒を勧められお酒を飲み始め
周りの人と話し始めてた。

わたしは、正面にいたおじさんに料理を勧められ食べながら話をしていた。
話を聞いていると、どうやら左官屋さんをしているという。
息子が居ると聞いたので、もしかしてと思いトトカを知っている？と聞くと、
それは、俺の息子だと予想どうりの答え。
慌てて、「第二隊副隊長をしてます。トトカたちには、いつもお世話になってます。」
と挨拶をした。
突然の挨拶で、今まで横向いて別のヒトと話をしていた隊長も此方をむき
如何したのかと聞き、「トトカのお父さんだそうです。」と紹介すると
隊長も慌てて、「第二隊隊長をしてます。トトカにはいつも世話になってます。」
と私と同じような挨拶をした。
すると、お父さんは「今日は祭りだから堅苦しい挨拶はなしだ。その代わり
トトカの話し聞かせてくれよ。」
と、笑いながら隊長にはお酒を私には料理を勧めてくれた。
周りの人たちもビックリしてたが、その後楽しく過ごした。

広場の夜（後書き）

と言う事で、トトカ父登場デシタ。
肝心の息子出てませんが。アレ？
イエ忘れてませんよ（存在を）　ヒデェ（泣）ｂｙトトカ

では、また♪

祭りの次の日（前書き）

おはようございます。
こっちは、あいにくの雨。
コタツ取っちゃったのに、寒いです！
まだ、取るのは早かったか。。。

祭りの次の日

次の日お祭りが終わり仕事だったが、まだ余韻が残っているのかみんなお祭りの話ばかりしていた。
もちろん、私も例外ではなかった・・・・。

いつものように執務室に行こうと廊下を歩いていると、早速トトカを発見！
コレはぜひ報告せねば！！と張り切って、トトカのほうへ・・・・。

「昨日ね！トトカのお父さんと一緒だったよ♪それでねいっぱいいっぱいトトカの話ししといたから
隊長と一緒に☆」
と言うと、「なんで呼んでくんなかったっすかー」
大声で言われた。

「アレ、お父さんと呑みたかった？会いたかったの？」と聞いたらあんたらの見張りです。との事
いや、挨拶とかトトカ仕事頑張ってますよ～とかしか言ってないし・・・
「ごめんね？期待にこたえられなくて・・・。」
「答えなくていいから。。。」と、安心した様子で言われた。

そんなやり取りをしていると、いつもの執務室に到着～。
トトカがドアを開けてくれ中に入ると、いつもどうり隊長は寝、寝てない～？
しかも、隊長の机の前で仁王立ちなメイド服を着たヨハンナが居た。
ガチャッとドアの音とともに私たちが入ると、一斉にこちらを向く

みんな。
なんなんでしょ。
それぞれ席についていたり、書類を整理していたりそれぞれの場所にいるのに
室内はしーーーーんとしていて、目線だけ此方に向けられている

「「どうした（の）？」」
と、聞くとメイが隅から移動して来てくれた。

「あのね・・・隊長、2日連続ヨハンナさんの誘い断ってヨハンナさんお冠らしいよ。」
2日目もか・・・。
「しかも、誰も一緒に行く人居なくて独りで居たらしくて・・・。」
あーーー。
「で、今朝からお祭りの話を散々みんなに聞かされた揚句、隊長と夕美の事を聞いて切れた訳」
うわ～って誰よしゃべったの！
「でも、本当に誰も誘わなかったの??」
すると、
「俺一応誘ったけど断られたケド」と、トトカ。
「ほかの隊のやつも何人か誘いに来てたし・・・みんな断ったんじゃないか？」
と、テディも話題にいつの間にか入って来た。
4人で、ひそひそ小声でしゃべっていると隊長たちに気づかれた！
ヨハンナには、ギンッと睨まれ隊長には手招き。。。
「テディ、呼んでるよ？」
「いや、トトカ行って来い。」
「夕美行ってらっしゃい～」
「代わりにお願い！メイ～」
もたもたしていると、隊長がこっちにやって来て

「来い」と私を連れて室内を出た。
「隊長もう帰るんですか～？」
「あぁ、仕事・・・のほうは大丈夫・・・か、帰るか。お前も準備して来い。」
と言われ戻り帰る支度をし、執務室の前で待っていた。

祭りの次の日（後書き）

いつも読んでいただいてありがとうございます。
お気に入りに登録していただいている方も、いつの間にか増えているし
うれしかったです☆

まだ、帰宅できません（泣）（前書き）

おはようございます。
今日も、曇り空。。。
当初予定していた（書こうと思っていた事）とは只今、ちょっと斜めにずれています。
まぁ、こんな事もある？のかな～（笑）

まだ、帰宅できません（泣）

隊長を待っていたケドなかなか戻ってこなかった。
支度、手間取ってんのかなぁ～
などと、思っているとメイがちょっと顔を出し「面白い事になってるわよ」
とおいでおいでと手招きをしてきた。

ちょっとだけならと思い行ってみると、やっぱり隊長とヨハンナの姿が・・・。
執務室内に戻したのがいけなかったか・・・
と思いながら、メイと一緒に野次馬と化していた。

「どうして、私のほうが先だったのに！！あの子とお祭りに行ったの！」
「仕事だ。」
「私、ほかのヒトからの誘いみんな断ってでも、貴方と行きたかった。」
「勝手に、断って期待されても困る。恋人でもあるまいし・・・
それに以前も行ったはずだ、俺の恋人はあいつだと。」
「・・・まだ、諦めませんから・・・。」
そう言って、涙ぐみながら出て行ってしまった。

「コレって、修羅場ってやつ？」
「そうかもね？」
などとメイとこそこそしていると、「オイ、帰るぞ。」
と後ろから声がかかった。
ようやく帰れるようだ。
「はい。」

と返事をしメイに「また明日ね！」
と挨拶した後隊長とようやく帰った。

まだ、帰宅できません（泣）（後書き）

はい、やっと帰宅です☆
いつも読んでいただいてありがとうございます。

女三人少しづつ・・・（前書き）

おはようございます・・・と言っても今は夜中。。。
眠いのに目がさえています（笑）

女三人少しづつ・・・

朝：光耶ちゃんにお弁当を何時もの様に作ってもらい出勤

昼：メイを誘い会議室（会議をしない時は使用していないのでランチをとる場所には最適☆）へ

昼食を食べていると、ヨハンナが入って来た。

「キリトさまは？」

「今日は、用事があるって出かけてるけど・・・。」

「そう。」

そう言って、会議室を出て行こうとしたヨハンナに

「一緒に食べない？」と思い切って声をかけてみた。

すると、

「せっかくですけど、食堂へいきますから。」

それを聞いていたメイが、「お弁当少し多く持ってき過ぎたみたいなの、

一緒に食べてくれますか？」と声をかけてやっと席に着いた。

なんだかんだ言っても女の子３人

話は、やっぱり恋話になってしまう・・・。

最初は、メイがヨハンナを気にかけて「この料理美味しいですか？」とか、「これは、弟が作ってくれたんですよ♪」など色々と話掛けていき

マダマダだけどヨハンナも相槌など少しずつ話すようになっていった。

女三人少しづつ・・・（後書き）

今回は、夕美＋メイ＋ヨハンナでした☆
チョビットだけなかよくなってる？カナ？？
ってあれ、恋話まで行かなかった～！！では。次回？？

休憩時間（前書き）

おはようございます。
天気いいですね～♪
前回の続きです。

休憩時間

昼食を食べながら、話をしていた私たち。

「そういえば、ヨハンナさんは隊長さんが好きなのよね～♪」
と言いだした、メイ
「どんな所が好きなの？」
「どんな所と言われても・・・全部ですわ。初めて見た時からこの人だと思いましたの。」
「でも、恋人いるみたいだけど・・・」
「関係ありませんわ！恋人の貴方には申し訳ありませんけど、キリト様だけは
諦めませんわ。」
えーーーと、諦めないのは判ったよ。
そう何回も言わなくても（笑）
２人がそれなりに盛り上がっている話を聞きながらお弁当を食べていると・・・。
今度は、メイの矛先がこっちに向いてきた。
「夕美は、隊長さんのどんなとこが好きなの？」
「・・・う～ん、起きたてのちょっと間抜けた顔とか、強引だけど優しいとこ
とか、隊長なのに威張ってないとことか？」
「ふ～ん・・・♪」
「今回は、私の負けですわ。」
いつ勝負してたんでしょうか？
「とりあえず、２人とも食べないと無くなるよ？」
そう言って、２人にお弁当を勧めその後も３人で話を少しすると
休憩時間が終わり解散となった。

休憩時間（後書き）

いつも読んでいただきありがとうございます。
改めて文章力の無さを気づかされましたョ～（笑）

昼食後（前書き）

お久しぶりです。
相変わらずの駄文ですが
よかったら暇つぶしにどうぞ。

昼食後

昼食後、いつものように仕事に戻る為丘へ
丘には、風耶が待っていたが最近風耶と居る時間が少しだけ減った。

それと言うのも、私と風耶の仕事と言うのは、丘での見張り。
あまりにも暇だったためある日、風耶に聞いてみた所
「僕が居るから、フラフラしててもいいよ♪」
と言われ、執務室に戻り隊長にその事を言ってみると
「じゃ、午後からはコッチへきて俺の仕事の手伝いな」
と言われてしまい、それ以来午後一度は風耶の所へ行き
それから執務室へ行くようになった。

執務室に着きドアをけると待ってましたとばかりに此方に目を向け、
最近隊長の机のとなりに置かれた新しい机（元々私が来た時に注文
していてつい最近来たらしい私の席だった）をパンパンと軽く叩き
さっさと座れと
促してくる。
それでも、のんびりしているとパンパンからバンバンに代わり音も
うるさくなる。
まわりと話をしていた私も、ちょっと自分の机が気になり席に座っ
た。
すると早速、「ほら、コレな」
といって、渡される書類。
そんなに重要なものじゃないものや計算しなきゃいけないもの。
「いつも思いますケド、隊長の半分はありますよね」
「おかげでたすかってる」そう言って、笑いながら頭を撫ぜられた
ら何も言えなかった。

いつものように全集中をして仕事が終わる時間にはようやく終わる。
。。
どんだけの仕事量（今度給料アップ要求しなきゃ！やってらんない）
を終わらせると、隣では隊長がいつものように寝ていた。
同じぐらいの仕事量だったのに・・・

隊長は、仕事が終わると直ぐに昼寝に入る→夕がた私が仕事が終わり
隊長の机の上に書類を置く→隊長を起こすという→隊長が書類を簡
単に見直す
という流れが出来上がっていた。

いつものように起こそうとしたが、ふと隊長の顔をのぞくと
すごく幸せそうだった。
「寝る子は育つってホントだよね～」
私も隊長みたいに寝てたらもっと育つかな？
などと馬鹿な事を考えながら隊長の顔を眺めていた。

そこを見ていた人が居ると気付かずに・・・。

昼食後（後書き）

いつも読んでいただいてありがとうございます。

～補足～
ちなみにこの後、もちろん起こしましたよ。
いつもの方法で・・・。
えっと、いつもの方法と言うのは一番最初にやった方法です。
（確か）↑書いた本人もうる覚えですが（すいません（汗））
そして、おこした後は、書類の確認をしてもらい、帰宅って感じですね。もちろん2人いっしょ♪
そんな感じでしょうか。

では、以上補足でした。

2人（前書き）

かなり間が空いてしてましたね（汗）
クー子です。お久しぶりです。
覚えていらっしゃいますでしょうか？
忘れている方に・・・

田中夕美（主人公）
風耶　（夕美と契約している精霊）
光耶　（夕美の兄と契約している精霊）
メイ　（夕美の友人）
トトカ　（トトカ＝オルコット　第二隊員）
ヨハンナ　（ヨハンナ＝ハンマル　ハタラージ国の貴族　一人娘）

2人

3人で昼食を取った次の日
光耶ちゃんに4人分のお弁当を頼み
持っていくことにした。
そしてその日から、お昼は女3人と風耶で
昼間いつも仕事している丘で食べることになっていた。

夕方、いつものように執務室に入っていくと、
トトカがヨハンナに異様に話しかけていた。
最近のトトカは、やけにヨハンナにかまっているけど、
ヨハンナのほうは、隊長以外興味無くトトカにも冷たい感じだった。

メイに詳しく聞こうと思ったけど、
そう言えば今日はメイ休みの日だった（汗）
（明日にでも聞こうかな？）
そんなことを思いながら、隊長の机の隣にある席に座り
どっから出てくるのかと思うぐらいの書類の量に
一瞬ビックリしながらも取りかかり、帰れたのはやっぱり
いつもと同じ時間だった。

2人（後書き）

読んでいただいてありがとうございます。
今回は短いです。

トトカの行動（前書き）

いつも読んでいただいてありがとうございます。

トトカの行動

次の日の昼

この頃、丘で４人昼食を食べるようになっていた。
チャンスと思った私はメイに聞こうと思ったけど
ヨハンナもいて何となく聞きづらかった。

結局、夕方執務室でヨハンナがまた
トトカに纏わりつかれている隙にメイに聞いてみた。

「昨日も見たけどトトカ如何したの？」
と聞くと「さぁ？？」とメイも判らないらしい。
２人して？？と不思議がっていると、
テディと、バイアスが此方にやってきて
私たちの疑問を解消してくれた。

「夕美と隊長の２人きりの所を偶然見てしまって、
最初はヨハンナに同情をしていたんだが、
ヨハンナを少しづつ見ているうちに好きになっていったそうだ。」
とバイアスが説明してくれた。
ちなみに、情報源は本人（飲みに行ったとき散々聞かされたらしい）

（相談されたら乗ればいいよね。）
とりあえず、私たちは当分の間見守ってみることに、
テディやバイアスも相談されるまで放置するといっていた。

トトカの行動（後書き）

今回出てきた滅多に出てこない人たち？（笑）

・テディー＝コック

見た目、性格お父さん

・バイアス＝アントノフ

メイを密かに気にかけている？

第二隊員でした。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2235n/

お兄ちゃんからの招待

2011年10月15日00時56分発行